特254
525

山口良吾著

火の國考

天の巻

始

火の國考

山口良吾著

天の巻

特 254-525

火の國考

山口良吾著

天の巻

序　言

我國古代史の權威であり、佐賀の先輩である、この程ツイ物故された、文學博士久米邦武先生は「肥前の上代史など、判るものでない。」と申され、初めから相手にされない如うであつた。かと思ふと、玆に亦喜田博士の如きは「肥前史が一向研究されて居ない」と、前途に我が肥前史研究の有望なことを嘆ぜられる有様である。

全体私共が「火の國」と云つて居るのは、抑も何處を指したものであるか、實は夫れさへ殆んど明瞭を缺いて居るのである。而してその火の國が肥國に改められ、更に肥前、肥後と分れたこと等に就いては、それが何時の代で、而も孰がその根元を爲して居るものか、今に論議されつゝある處で、確かな定説とて無さそうである。先づ風土記等の火の國說から云へば、肥後が根本のやうでもあるが、それとも津田左右吉氏等に云はせると、肥前が本體だと語られて居る姿である。

私が玆に此の火の國の諸問題に就いて、僭越ながらも徹底的に之れを研究して見たい、と斯様に手を染めたのも一はその爲めであります。鄕土史研究の熱は最近漸く高つて來た。勿論それは結構なことであるが、然し其の之れを十分に究め盡す

爲めには、尙ほこゝに尠からぬ用意が要るのであります。
文献の蒐集、實地の踏査、學理の研究等は其の用意の中でも、特に必要な條件であります。だが假令此にこれ等の用意は遺憾なく出來たとしても、更にその基礎を形造る幾多の問題に就いて解決を遂げなければ駄目である。
爰に御發表申上げる事柄は、その基本問題の解決とも云ふべき點で、云はゞ皆様が鄕土史を編纂される場合の骨組となり、血や肉と爲る所の極めて大切なものであります。
デ之等重大な數種の問題さへ玆に十分な解決が出來れば、我が肥前國內には極めて統制ある、そして見事な各地方の鄕土史が容易に編纂され得ること、信じます
ダが之等の中心問題が未解決の儘に拵へられた鄕土史だとすれば、体裁はよし好くても、決して夫れで完全なるものとは云へないと思います。
私が爰に所謂中心問題とは、蓋しその出發點を崇高なる我が國體に淵源せしめ、世界無比の皇國に基礎を置いての研究に外ならぬものだからであります。
曩に今上天皇陛下の一度大御心を、鄕土史の上に注がせ給ふや。此の方面の研究が全國的に蔚然勃興したのは洵に欣ばしい現象である。彼の諸葛孔明は常に自作の梁甫吟（春秋時代齊の景公の時の三勇士を味ぜしもの）を吟誦した、蓋しその故鄕の古史を懷ふに出れりと、又彼は常に自らを管仲、樂毅に比した、是れ亦その故鄕の古史の偉人を慕ふ情から出たものであると謂はれて居る。
鄕土を愛する心には矢張り古今東西人の齊しく渝らぬ心理狀態である。

火の國考　天の卷（甲編）

目次

第一章　日本の文化は、全く獨自的のもの　一
第二章　日琉人共同根元說　八
第三章　その琉球祖先論　九
第四章　琉球は、日本の一部分である說　一〇
第五章　奄美大島は、琉球祚肇基の地　一二
第六章　人類學的研究の結果は　一四
第七章　所謂ドルメンの分布の此地に多いのは、何を物語るものか　一七
第八章　肥の國には尙ほ盛澤山の古代語が殘されて居る　一九
第九章　全く我が火の國が日本文化の源泉である　二九
第十章　古語を保存使用せよ　三一
第十一章　杵藤中心地方には、神代語が多い　三四
第十二章　肥人文學の存在は、當年の文化を物語る、何よりの證左である　四四

火の國考

天の卷　甲編

山口良吾　著

日本の文化は火の國から

第一章　日本の文化は全く獨自的のもの

光格天皇の御製に

　敷島のやまとにしきに織りてこそ
　　からくれなひもいろにはえあれ

とあります。蓋し之れ我等日本國民が、過去に於ける文化創造の徑路を、賞へ給ふた御製だと拜察するのであります。

從來日本文化として、優に世界に誇り得べきもの（日本文學の創造、國文學の勃興、木板印行、日本刀、江戸文化と室町文化等）を出せるは、皆な日本人の頭腦より案出せられたものでないものはない。誰れか日本人を指して模倣の國民といふ。日本人は其の初めに於て模倣を怠らなかつた、しかし其の模倣は採長補短の爲めの模倣ではなく、此の模倣を創造の母として、終に獨自の文化を創造するに至つた。

此の意氣こそ過去より現在に繋がり、現在より更に將來に傳ふべきものではないか。

日本は大陸文化に接觸する以前に於て、既に多くの年月を經過したもので、此の年月の間に醞釀せられた國民精神は、容易に大陸文化によつて變易せらるべきものではなく、一時は其の絢爛（けんらん）の美に迷ふて模倣を之れ事としたが、時を經るに從ひ、其の傳統の精神は自主的に之れを採擇して、終に日本化せずんば已まざるの勢を示した。（加藤咄堂著新興日本の精神）結局我々日本人は、元々此の島國（尤も當初は亞細亞大陸東南の海邊であつたこと後述の通りである）に發祥したもので、之れを現在の貝塚や神代文字(不二文字)等に就いて見ても、早や四五千年以上を經過して居ることは確かである。若し夫れ滿蒙の地の如うに我國土にも濕氣が無かつたものなら、尙幾多の年代を考證するに十分な材料が手に入るかも知れ無いのだが、幸か不幸か特に我國に濕氣の多い所から遺物

が悉く腐朽し去つてその資料を得ることの出來ないのは殘念の至りである。

最近京大の清野博士は考古學の上から此事を立證するに有力な調査を遂げられたと昭和八年六月四日の大阪毎日新聞には報道して居る。

夫れに依ると「古代民族の骨格上から見て、日本乃至朝鮮、滿洲、支那各地民族はそれぞれ異つた特長をもつてをり、殊に頬骨秀で額高く、頭はやゝ丸味を帶びてゐる、わが大和民族特有の骨格は、全然鮮、滿、支の民族間には認められず、一部いはれてゐるやうな大和民族の滿洲方面渡來說など、認めるわけには行かないと思ふ」。とある。

私など元より博士の御說と同感である、從來は唯單に遺物等によつて、兩者の比較研究が進められてあつたのに對し、清野博士の今回の此の調査研究は、私等考證家にとつては、實に無上の考證資料を與へられたものだと、博士に感謝せざるを得無いのである。

大毎の記事は次の通りで、參考の爲め掲げ置くことゝする。

（參考）

わが大和民族の骨格は全く獨特

考古學の實地踏査のため、わが軍ならびに滿洲國軍兵士約五十名の護衛を受け、古代人骨ならびに古器物研究に造詣深い京大醫學部教授清野謙次博士とともに錦州近郊義州の石窟寺や奉國寺を視察し旅順の近郊では石器時代の貝塚發掘をやつてゐた同大學文學部教授濱田耕作博士は三日朝關釜連絡船で下關着、同九時發、京都に向つたそのおみやげ話……

清野博士は語る——支那古代の樂浪文化が支那本部、朝鮮へ發展してゐた時の交通の要衝は今の滿洲地方で、その意味から現在の滿洲人は支那本部人、朝鮮人と滿洲土着人との混血兒とみなさるべきで、この關係はこんど渡滿して旅順の近郊で古墳發掘の際發見した古代人の骨格や遼東各地で發掘されてゐる人骨と現代滿洲人の骨格とを比較研究して見ていよいよ確かめられた、同時に古代民族の骨格上から見て日本乃至朝鮮、滿洲、支那各地民族はそれぞれ異つた特長を持つてをり、殊に頬骨秀で額高く頭はやゝ丸味を帶びてゐるわが大和民族特有の骨格は全然鮮、滿、支の民族間には認められず、一部いはれてゐるような大和民族の滿洲方面渡來說など認めるわけには行かないと思ふ。

濱田博士は語る——義州の石窟寺は千四、五百年前、魏の時代に作られたもの、今度漸く願望を達したわけだ、石窟の中にはいくつもの石佛が刻まれてゐるから長い歲月比較的原形に近く保存されて來たもので滿洲國にとつては將來國寶として殘さるべき價値がある。

しかし現在でも心なき惡骨董屋連がひそかに石窟内に忍び込んで貴重な遺物を毀して持去るなどのことが頻々と起り次第に荒されて行くのは惜しむべきで善隣日本の學者として私どもは同地方の滿洲國官邊に同國政府の手で適當な保護機關を設けられるよう希望しておいた。

奉國寺は約九百年前、遼の時代に造られたもので木造としては滿洲最古の建築物だ、石窟寺とともに滿洲國の貴重な國寶の双璧たるべきものと思ふ。

曾て、中村平次郎氏は云ふ。

「人類は、海岸近くで、山幸海幸に富む處に、自然と靈氣が集結して發生するものである。」

最近九日紙上に三松莊一氏が「日本民族が大和入りをした當初を漁獲時代と云ひ、我々の祖先は概ね海岸地帶に住んで居た、そこで海の彼方に非常な憧憬を持ち、そこを常世國と呼び人間の吉凶禍福の一切が海から來ると考へ神秘な憧憬や驚異恐怖の念を海に對して抱いて居た」。と云つて居る。

全く然うである。我が日本國は、元々亞細亞大陸の一部分で常に常世の國太平洋の陽氣を浴み乍ら、世界人類の始祖天御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神の所謂造化の三神は、玆に初めて化生遊ばしたものである。

古事記に

天地初發之時、於二高天原一成神名、天之御中主神。次高御產巣日神、次神產巣日神、此三柱神者、並獨神成坐而、隱身也。

とあるが夫れである。

斯くて相當年代を經た後、例の日本海の大陥沒があつて、我國は爰に大陸を離れ東海氣朗らかな洋上に恰も蜻蛉の舐嘗めするが如きいとも麗しい姿を現はして、全く獨自的に國を建つるに至つたものである。

古事記に

次國稚如二浮脂一而、久羅下那洲多陀用幣琉之時、云々

とあるのが、その時代であつた。その後悠久幾百萬年（日本紀には天孫紀元より神武登極に至る迄年を歷ること壹百七十九萬貳千四百七拾四歲とある）世界の人類は此の大八洲國から分れて往つては、各自國を成したのである。

古事記に

生二子水蛭子一、此子者入二葦船一而流去。云々

同　記に

得二三貴子一、（略）賜二天照大御神一而詔之、汝命者、所二知高天原一矣。（略）次詔二月讀命一、汝命者、所二知夜之食國一

矣事依也、次詔建速須佐之男命、汝命者、所ニ知海原一矣。
事依也。

こは申すまでも無く伊邪那岐大神が三貴子をして全世界を分治せしめ給ふたことを記したものだが、之れを今日の世界に充つるに、實に次の如うで、全く以て世界人類の始祖が我が諸神を始祖として居ることが判るのである。それかあらぬか現に印度ビルマ等の建國の歴史を按ずるに、その孰もが「吾等の始祖は葦船で東海から來られた」とあるのも面白いことである。

○天之御中主神（修理固成神詔）— 伊邪那岐神 / 伊邪那美神 — 三神分治神勅

- 月讀神は夜食國を治らせ — ヒルゴ（米大陸）— 右主左從 / 女性文明 / 唯物之國 — 西半球
  - 伊邪那美神之黄泉國
  - 御毛沼命之常世國
- 天照大御神は高天原を治らせ — 天壌無窮神勅 — 八咫鏡 / 八坂瓊曲玉 / 叢雲劍 — 大日本天皇 — 大日本國
- 須佐之男神は海原を治らせ アワシマ — 歐亞濠大陸 — 左主右從 / 男性文明 / 唯心之國 — 東半球
  - 稲氷命之妣之國
  - 五十猛命 少名彥命之國

（朝倉氏案）

朝倉氏は云ふ。

「さて大地の中心が定りて天地の御柱を御立てあそばされ裁に萬姓の基本たる夫婦の道をお始めになりましたが天の御柱を行きめぐりますとき左と右との道を誤りあそばして水蛭子と淡島の二大半球を御産みになつたのである。左は靈足、火足で右は身極、水限の意義である。然るに日本紀には伊邪那岐神は右位に伊邪那美神は左位にありて天之御柱を行き廻りたまひミトノマグワヒ遊ばして先づ女神よりアナニヤシメオトコヲと言擧げ給ふにより御産みに成つたのが世界萬國則ち水蛭子、淡島である故に彼の國性が女權萬能の國で右を主とし左を從とし女尊男卑の國體であるはそれが爲であらう。

聖人も牝鶏の朝に啼けば其家亂ると言へる如く伊邪那岐神詔り玉はく我は男にしあれば言先きたつべきに女言先きたつは不良とて、天之御中主神の御許に到りて御教を御受けになると高御產巢日神は太兆に占へして天之御中主の神の御心を受けさせたまひ詔りたまはく男は左を位とし女は右を位とせよ而して男神先づ言擧げて女神之に和唱し再び中津國に下りて改め言へよと仰せられそこで御教へのまにまになしたまひて產れたのが大日本國である、則ち天理人道の結晶である。

我國は古來の傳說として婚禮には高砂の圖をかけて左右の辨を明かに教へたものである。其圖は中央に一本の松（天御柱）ありて其左位（伊邪那岐）右位（伊邪那美）あり松の上に天津日の昇れるを見る之れ天津日嗣の御子の降誕を象徵したるものである。

又雛祭を見るも左は內裏樣右は御姬樣で左は櫻右は橘で所謂左近の櫻は男性で右近の橘は女性の象徵である。之れが我國傳統的の教育法にして、教育御勅語にも皇祖皇宗國を肇ること宏遠に德を樹つる事深厚なりと仰せられたるも此左右の辨を明かに天理人道を御示になつたのである。

さて日本と世界との關係に就ては始め國祖二神が男女左右順逆正否の道をふみ誤りたまひて水蛭子、淡島を御產みになつたがヒルゴは西半球で亞米利加である晝の反對の國で夜の食國であり晝の子でメリケンの意で月讀神のしらすべき國で根の堅州國で伊邪那美の行きたまへる黃泉の國である、故に國性に顯はれて唯物の國女性文明の國平面的の國積極的の國求心性の國である。

アワシマは東半球で亞細亞、亞弗利加、歐羅巴、濠洲である、須佐之男神の治めたまへる海原の國である故に國性に顯はれて唯心の國男性文明の國立躰的の國消極的の國遠心性の國である、特に東洋文明は宗教によらず道德によらず

藝術によらず總て精神的文明である、世界の三大聖人にしても皆東洋の出產ではないか、而し之が爲にともすれば厭世主義に傾きて小乘主義になるのである。之に反して亞米利加は飽くまで物質文明の權化で經濟的打算的現實的である。

尙系統的に說明すれば東洋は高皇產靈系伊邪那岐神系にして左文明靈系文明である。西洋は神皇產靈系伊邪那美系にして右文明體系文明である。

又世界民族の關係を論ずれば大日本國は天照大御神系氏族亞細亞大陸は須佐之男系支流、亞米利加大陸は月讀系支流である、然して大日本國は大乘的文明、中庸中和の國で東西兩洋の中心なる事は國祖の三神分治の御神勅によつて明かである則ち我國は天照大御神のしろしめすべき高天原である、故に國性に顯はれて自然に一元的で天地の中心をマツリ左右の中心をマツリ靈肉の中心をマツリ縱に偏せず橫に偏せず幽に偏せず顯に偏せず生を輕んぜず死を輕んぜず所謂縱橫文明の國で十字の國（天津金木による天之御中主神の置座である）縱橫無盡の國で靈の國で慈悲無量光の國であり日光放射の國である之を美的に現して菊花に配し大日本天皇の御威德を表象するには光明遍照十方世界の太陽でなければならぬ、故に大日本の國旗は日の丸である、須佐之男命の治めたまへる亞細亞大陸の國旗は青龍で月讀命の治めたまへる亞米利加大陸は星の國旗であるところより見るも、我が皇典が世界の正史であると共に大日本國が世界の祭政を司るべき中央政府であることが自から分明である。以上は史實であつて只考證を具體化した丈けである決して牽强附會の說ではない」。

而して氏は近江が神代の帝都であり、高天原であつたと云ふ說を强調せられて居る、勿論或る時代氏の說の如うに近江に高天原が在つたは相違無いが神代を通して高天原は常に近江なりとの御說に從ふことは出來ない、然し世界人類の發祥と世界祭政の基礎が我が大日本帝國であると云ふ點に至つては前述の如うな私の考へも全樣で全然氏と同感である。

最近木村鷹太郎氏、石川三四郎氏等が妙な說を立てゝ我が嚴然たる國史に一つの暗影を投げつゝある如うだが無論採るに足らない說であり、石川氏の如き自らその突飛な說であることを次の如うに告白されて居る位である。

「我が天孫民族を以て彼のヘテ或はヘト或はヒッチトと稱せらるゝ古代の一人種であると見做し、出雲民族を以て彼のパクトリヤンなりと主張せる邊りはアカデミックな學者の眼は頗る突飛に見へるであらう。併し新說は何時でも突飛なものである。コウした冒險が無くては何事でも進歩發展の道は開けない」。（石川氏古事記新話の新研究）と云つて居る。

尙最近佐藤林賀氏のドルメン說に特に吉町義雄氏の肥前地方の方言に就いてケルト族の移動を叫びケルト語の流布を語つて暗に我が天孫民族の祖が彼のケルト族（往古地中海から小アジア、アフガニスタン等に棲息した所謂アリアン人種の種でフランス方面に勢力を揮つたが次第に衰亡したものである）の後であるとホノめかしつゝあるのも心得難いとである。

昭和七年三月二十一日、長崎入港の上海丸で我國を訪問した米國の神學者ワーレン・メースン氏は日本民族精神である、神道がキリスト敎や佛敎等に斷然優れて、將來東洋をリードするものは、神道イスムを根幹とする日本より外に無い」と禮讚して居る、此の精神は木村、石川兩氏等の唱へられるが如き、かの廣漠唯無味乾燥な亞細亞大陸から移住したものゝ一朝一夕にして出來るものでは無い、我が國は斷じて他より移住した國民では無い全く幾百千萬年前獨自的に此地に化生したものであることを再三玆に申上げて置くものである。北畠親房卿はその神皇正統記に何と述べられて居ますか「大日本は神國なり、天祖はじめて基を開き、日神ながく統を承けたまふ、わが國のみこの事あり、異朝には、その類なし、この故に神といふなり」。と宜哉我が大日本國は宇宙の大元靈であらせらるゝ天之御主神の大御心である天沼矛に成れる游能碁呂島である。則ち自然島は宇宙の大自然よりなる國の義である之れ大地球初發の產土で世界萬國の中心である。之れを葦原の中津國とは申すのである。

此の中津國は世界人類平和の神として鎭りたまふ大日本天皇の御宮城である、外より之を仰ぎ見奉りて天御柱國御柱とは申すのである。

大日本天皇は天之御中主神の御直系にましまして國之御中主人之御中主の現人神であり、又世界の大救世主であらせらる此故に天皇の尊稱を「アメツチノキハミシロシメス、スメラミコト」と申す、此意氣をお互國民の腦裏に明瞭に自覺させることは、國民思想の善導の上に唯一の道であると思ふのである。

第二章　日琉人共同根元説

（一）明治二十七年に、言語學者のチェンバーレンは、琉球に遊び、種々の方面から此の列島を研究したが、その結論が斯うであつた。

「琉球人は、其體質日本人に善く似て、モンゴリヤンの型を有し、彼等の祖先は、かつて共同根元地に住してゐたが、西暦紀元前三世紀の頃、大移動を企てて、對馬を經過して九州に上陸し（良吾云、之れ勿論韓半島から渡來したものであろうが、我が神代の時から九州島に來り九州島から到るには、常に此の對馬經由を爲したものである、蓋し之れを當時の小舟が玄海の怒濤を避けたものである、而してその發着地は無論我が肥前であつたものである。）その大部隊は、道を東北により、ゆく／＼先住人民（アイヌ族等）を征服して、大和地方に定住するに至つた。（良吾云、之れ神武東征の際に、彼の長髓彥が使を立て「昔、天神の子、天磐船に乘りて降りたまへり、櫛玉饒速日命と曰ふ吾が妹三炊屋媛を娶りて、可美眞手命を生み給ふ、故に饒速日命を以て君として仕へ奉れり。天神の子、豈兩種あらんや奈何ぞ更に天神の子と稱して、人の地を奪はむとしたまふや。」と抗議したのに對し、天皇の「天神の子亦多し、汝の君とする所、是實に天神の子ならば、必表物あらむ、以て示すべし。」とあつて、長髓彥は爰に饒速日命の天ノ羽羽矢及び步靫を取つて示したので、天皇も夫れをば實物だと宣ひ、その御する所の天羽羽矢と步靫ともお示し遊ばしたので、饒速日命は遂に長髓彥を誅し、衆を率ゐて歸順した、此の可美眞の後が例の物部連や穗積臣である等は、我が國史に顯著な事實である。）

その間に、南方に迯ひつゝ有つた小部分の者は恐らく或大事件の爲に、逃れて海に浮び、遂に琉球諸島に定住するに至つたのであらう。

それは地理上の位置でも、傳說の類似でも言語の比較でも容易く證明される。」と、

彼は又、日本人と琉球人とが、最著しい系圖的關係を有してゐることを、言語學上から推論して曰うやう。

「この二國語の文法を綿密に比較すると語詞論にも、措辭論にも、根本的一致の存在することがわかる。而も近代の日本語が、上世の日本語を代表するよりも、琉球語がそれを代表することが一入忠實である。それは動詞の語尾變化に著しく現はれてゐる。最近の佐賀縣教育に川上淸吉氏が佐賀縣の方言を此の文法上から研究されて居るのを見る。要するに二國語の關係を、スペイン語とイタリー語の相互的關係、否、むしろスペイン語とフラス語の關係に比較しても、大過なし。云々」

と云つてゐる。之と略ぼ全樣のことを昇曙夢氏が或る新聞に「文學者の見た光榮の奄美大島」の一節に、大島語の內には、鎌倉時代及び其以前の言葉が基本となつて居る。現に內地では、とうに忘れられてゐる古語、記紀万葉の言葉が大島では今でも俗語に使用されてゐる。俗謠なども、すべて万葉調である。大島語の原を質せば大抵古代和詞から出てゐる。例へば、大島の古歌に「今日のよから日に、女夫まぐはひて、巢ごもりの榮鶴の如くに」といふのがある。古事記を繙くと、「伊邪那岐の命、然らば吾と汝と是の天の御柱を行き廻り逢ひて美斗能麼具波比爲せ。」云々とあるが、まぐはひ即ち結婚の意義である。此の神代語が入つて居る如うに、此の島の史實にも亦日本の歷史と密接な交涉を持つて居る点が非常に多いのである。私の知人で沖繩郷土史の研究家島袋源一郎君は「現在の琉球語は母音のアイウの三音丈け響いてエとオと二音を缺いで居る。」と話した、之が爲めにサッパリ判らないのも無理が無い筈。我國古代語の權威北里闌氏は曾て此處に遊んで

〇眼を閉ぢて時と處を思はずば
　神代に近き聲ぞ聞こゆる

と、全くその通りで、到る處に古事記の講談師が居る如うである、況んや田舍人には今日尙ほ源平以前の我が內地風俗その儘の左襟の人等が澤山居るに於ておやである。

第三章　その琉球祖先

本島出身の文學博士伊波普猷氏は、その琉球祖先論中に述べて曰く

「琉球群島民は、殆んど同一なる言語、風俗、習慣、容貌、氣質を有し其神話の語る所によれば、琉球人の祖先も亦天より降れりといふ。之に就き二百三十年前に死せる羽地王子向象賢氏は、其仕置といふ隨筆の中に、竊惟者、此國、人の生初は日本より爲渡候儀、疑無御座候。然者、末世の今に、天地山川、五形五倫、鳥獸草木の名に至迄、皆通達せり。雖然、言葉餘に相違候者、遠國の上、久敷通融絕し故也。五穀も、人と同時に、日本より爲渡物なれば。

云々。」

と、彼のチエムバーレンも之等の説にヒントを得て研究に取掛つたかも知れ無い。蓋し之れ琉球人の祖先の日本人から來たといふ説の主唱者であります。

近く明治の初年には、三司官の一人、宜灣朝保氏の如きは、此の向象賢の説に賛成して、

「日本上古の言語は琉球は今も多く殘れり」

と云つて、三十餘の琉球語を取り出して、記、紀、萬葉の中の古語と比較論定して居られる。

第四章　琉球は日本の一部分である説

(一)、金澤博士が曾て沖繩教育會に招かれて、述べられた次の演説の一節は、此の向象賢の説を十分に裏書してゐ如うである。

「このグスク(良吾云、琉球語では城のことをグスクと云ふ八重山の如きは、石垣で圍んだ所をもグスクと云つて居る)と云ふ言葉は、沖繩人が大和民族であるといふことを證明する、好材料となるものであります、朝鮮の古語では村のことをスキ、村主のことをスグリ(宿禰と同意義)と申します。この言葉は日本語に這入つて、日本の位の名にもなつてゐたのでありますが、それと同意義の言葉が日本語では城と書いてシキと讀んで居ります、大和の地名にシキといふ所がありますが、又シキシマ(敷島)といふ、日本國の名にもなつてゐます。シキは城といふことになります。シキといふ言葉を研究して見ると二つに分けることが出來ます。シは住むと云ふ意味で、キは圍の中と云ふ意味であります。即ち圍の中に住むといふ意になります(中略)然らば日本國でシキ朝鮮語でスキと云ふ事は、一體どういふ所を指して、さう云ふたのであるかと云ふと、高い所にあつて、石の壁で取圍まれて居る所といふ、意味であります(中略)それで日本語のシキと朝鮮語のスキも琉球語のスクも皆城壁といふ意味であります。(良吾云ふ、共にカ行サ行の通音である。)是等の名詞で、正鵠を得た判斷が出來るので、沖繩は敷島即ち日本の一部分であるといふ事は、爭ふ可からざる事實であります。歴史がなくとも、傳說がなくとも、記錄がなくとも神話がなくとも、沖繩人の祖先は、日本人のそれと同じく、シキの中に住んで居た事が證明されます。云々」と、

(二) 尙ほ此の琉球の開闢が、內地のそれと、よく似通つた點の見出されるのは、おもろおさうし卷の十にある、琉球開闢の歌である。

むかし　はぢまりや　てだこ　大ぬしや
　　きよらや　てりよわれ
せのみ　はぢまりに
てだいちろくが
てだはちろくが
おさん　しちへ　みおれば
さよこ　しちへ　みおれば
あまみきよは　よせわちへ
しねりきよは　よせわちへ
しまつくれ　てゝ　わちへ
くにつくれ　てゝ　わちへ
こゝらきの　くまぐ
こゝらきの　くにぐ
しまつくら　ぎやめも
くにつくら　ぎやめも
てだこ　うらきれて
せのみ　うらきれて
あまみや　すぢや　なすな
しねりや　すぢや　なすな
しやれば　すぢや　なしよわれ

以上之を意譯してみますと、

「最初に日の神あり、美しく照り耀けり。日の神俯して下界を瞻たまふに、ただよへる國(良吾云ふ、古事記の多陀用幣流之國とよく相似たり)ありければ、アマミキヨ、シネリキヨ二柱の神に詔りして、之を修理しめ給ふ。二柱の神詔のまにまに降りて、數知れぬ島々を造りぬ。日の神待ちわび給ひ、その成るを告るや、更に詔して「そこには天つ國の民の如き者を造る勿れ、然らば人類を造れと宣ひき」といふことになる。

(三) 之を古事記の次の開闢の條と比較するに

於是天神、諸命以 詔二伊邪那岐命伊邪那美命二柱神一修二理固二成是多陀用幣流之國一、賜二天沼矛一而、言依賜也、故二柱神立二天浮橋一而、指二下其沼矛一以畫者、鹽許袁呂許袁呂邇畫鳴而、引上時、自二其矛末一垂落之鹽、累積成レ島、是淤能碁呂島。

で、之を研究するもの誰かその類似の點の著しいことに感付が無いものがあろうぞ。

第五章　奄美大島は琉球の祚肇基の地

（一）　この琉球開闢の神アマミキヨの名は、琉球人の祖先が九州から移動の際、途中に奄美大島を經て、此の琉球に來たと云ふことを證明する全くの手がかりとなるものだと思ふ、奄美大島の住民も亦、自らそのアマミキヨの後裔だと稱してゐる。彼等の口碑によれば、アマミキヨは、はじめ海見嶽に天降して、大島を經營したが、暫らくして後に、南の方へ行つたといつて居る。（良吾云ふ古事記に大島を亦の名を「大留る分け」と書いてある、之に對し識者は之れ兩半球から流れ來る全世界の人類萬有の犯せる天津罪國津罪の總ての罪科を茲に集つて祓ひ清めらるべき天則神律の靈地で、大留る分とは則ち世界の罪科を爰に大に留めて分解釐理を行ふ場所であるといふ意義だと云つて居るが、私は矢張前說の如うに一旦此に踏み留まつて英氣を養ひ、次で西北南北に分れたことを物語つたと考へる。）

以上の如くんば、古の奄美即ち現在の奄美大島こそ琉球國の祚肇基の地で、喜界島（東）德之島（南）永良部島、與論島と共に大なもの五島、其間に小嶼が點綴し、大小總てゞ十餘からなる之等諸島の風土は、大抵琉球に似て、夏涼。冬暖、よく草木が繁茂し、最近名瀨等に、不幸キリスト敎の不敬事件等があつて騷いだが、一般島民の民俗は、至極敎樸である。沖繩作田節の歌に

天みこの御神、天降りめしや、うち造る、島國や、世々に榮ゆる。

とある。シネリキユ（志仁禮久）とアマミキユ（阿麻彌姑）の一男一女が化生した所であると、今尙此島人は、堅く信じ切つて居る。

（二）　爰に私は、大に力を得たのであります。前に述べた天忍穗耳尊の天降りを意味する、權現の平戶島安滿嶽（テマダケ）の降臨である。即ち權現は七才の時支那と日本の潮の境五島列島の男女島？から最初は五島へ、次で此の平戶の安滿嶽へと臨まれたものである。

安滿嶽は、平戶島の最高山で、その西北岸の一角白埼（長崎港口にも白崎あり天門山と別稱す）の東に聳立する高さ一、七九〇呎の高山で、頂上に至るまで森林が密茂し、之を仰げばそこに神氣の自ら迫る如うである。

オモロ草紙によると、アマミヤ、シネリヤは天つ國の意を表はしてあるものゝ、この二語の元來の意味はアマミの家、シネリの家といふこととなり、琉球人が昔時居住した故鄕をさすもので、伊波文學士は。結局海人部の家の義だと云つて居られる。

（三）　海人部の家の義から考へ當るのは

肥前風土記、大家嶋と、値嘉嶋との條にある、大家ノ島の白水郎が、土蜘蛛征討の跡に、家を作り、値嘉島の土蜘蛛が恩赦を願ふ條の先に、此の白水郎は、牛馬に富むとの記事のあることとである。

而も此の白水郎は容貌が隼人に極く似て、恒に騎射を好み、其の言語風俗の異つた人種である等と、ある所から眺めても南國人と共處に、密接な關係のあることが判るであろう。

尙ほ此のオモロは、エトとも稱する古歌集で、エトは別述した通り、現在我が一般國民の稱へる、ウタの語原で、歌はこのエト即ちオモロから、發達して來た言葉であること等から考へ合せると、之等アマミヤ、シネリヤ等云ふ、オモロ草紙の傳說は、結局我等現代大和民族の始祖等が築き上げられた傳說である、と云は無ければならないのである。

佐賀地方の諺に「海人の子、流した如うに」と云ふのがあるが之れも何だか意味のありげに受取られる。

思ふに海見嶽及び奄美大島の名稱は、曾て我が肥前平戶の安滿嶽に居た、琉球人の祖先が、その沖繩に來る前に、暫らく此の大島に滯在して居た事實を物語るに最も適はしい歷史であると申さなければなりませぬ。尙ほ之等の琉球人が、元々我等

（四）　火國人と同一の祖先から別れたと云ふことは、他の內地一般には、旣に早く死語となり、尙又元々から有つて居無かつた言葉をも。現在まで盛に使用して居るのが、何よりもの證左であろ？、例へば

いめ（夢）、いが（わ「吾」いか「我」）、たね（男根）、ほそ（臍）まる（糞のまりおける古くそ等）、なす（產む）、さくり（噦噫、逆氣のことなり）、ことい（こてい牛、特牛のこと、牡牛の壯健なるものゝ古語）、ゆひまわる（相互扶助、普通「いゝすると云ふ」わたまし（轉居）等の共通した言語が夫れである。

兎角以上の言葉を記紀萬葉源平語の如き、日本上代の文學を少しも讀んだことの無い、小島民がその日常に最もよく之等の言語を使つてゐることを聞いたら、先づ驚かさるを得無いであらう。

之等の言葉はたしかに、琉球人の祖先が我等大和民族と手を

別つて南方に移住した頃から有つてゐた言葉の遺物で、蓋し琉球の單語は、その十中八、九までが、日本語と同語根のものであるといつても決して過言では無い。ただその音韻の變化や語尾の變化によつて、一寸聽いたのでは恰も外國語の様であるが、能く聞いて居ると、全くよく日本語の姉妹語であることが判るのであります。

昭和八年七月五日ラヂオのことば講座で伊波普猷氏が「琉球の方言」に就いて放送されましたが、氏は云ふ「琉球といふものが一つの獨立した言葉であるか、日本の國語と姉妹的なものであるか、又一方言であるか、今ははつきりいへない。ただ言へることは古い時代に日本語から分岐したものであるといふことである。分岐した時期は詳らかではない、建國前に分岐したものでないかと思はれる。南洋方面には古語廢語といふものが澤山保存されてゐることから見ても考へられる」云々

第六章　人類學的研究の結果は

（一）而も最近鳥居龍藏博士等が、此處にも人種學的にも研究を進められた結果、一層此の移動説が確實性を帶びて來たのは頼毋しい現象である。此の博士の説では「九州では北九州は大部分固有日本人でアイヌ遺跡は極て少ない」。と語つて居られる。

（二）　加藤三吾氏が「平戸しるべ」の中に、琉球語に於ても、阪路をビラ、フイラ、ヒラといひ、黄泉平坂のヒラも或は同意義らしく、ヒラを絶壁と解することは、强ちに固有アイヌ語と斷することが出來ない。況んや平戸附近特に九州西北部から朝鮮半島南部にかけて、平戸の庇羅と發音類似の地名が數多見出されるのは一考の價値あることであるまいか。即ち、伽羅（カラ）、新羅（シルラ）、百濟（クダラ）耽羅（タンラ）、末羅（マツラ）、馬渡（マタラ）、加唐（カヽラ）、多々良（タ、ラ）、多良（タラ）等は其の例である」と云はれて居る。之れ蓋し加藤氏は未だ琉球語の、之等內地若くは朝鮮南部語と同系で而も本來アイヌ語であることを理解せない結果、斯く云はれたものだと思ふ。

（三）　南太平洋の眞中にトンガといふ小群島がある。こゝの社會組織が、古代日本のそれと非常に良く似た所があると、米國カリフオルニア大學の博物館主事ギフオード氏が云つて居る。ギフオード氏はトンガ群島の人類學的研究に九ケ年を費し、其の研究が最近「トンガの社會」と題し、ホノルヽのビショプ博物館から出版された。それによると、今から九百年ばかり以前日本人が、トンガを初め南太平洋諸島一帶に移住して、其の支配的勢力の一となつたものらしくトンガ及び其れに續くポリネシア及びミクロネシアの諸島には、古代日本をしのばしめるものが多く、政治に於て國王の外に、國政をあずかつてゐる將軍や執權職などに相當するものがある。祖先を崇拜する風も厚く、神の血統を引く後裔であることを誇りとし、其の祖先を氏神として尊崇してゐる。それから國王乃至大酋長を山陵に葬る風も日本と同様である

（四）　神話、傳説などにも日本と一致する所が多い。云々と濠洲から報告されたことを某紙で拜見したことがある。

祖先を氏神として齋祀せる國民は世界中に我が日本人より外にない、のみならず今日琉球に於て尙且つ墳墓を、普通住居よりも宏大に、金をかけて築いて居る如うに、此のトンガに於ても亦、我が古代遺風その儘の琉球に類する山陵築造の傳へられて居ることは、此のトンガ群島民も亦琉球や奄美群島と等しく、大古我が九州の本地から、潮流に乘じて奄美、琉球、南洋と漸次移動して行つたものではないかと思はれる。

（參考）

南太平洋に日本島
九百年前邦人が移住したトンガ群島
風俗習慣が日本人とそつくり

南太平洋の眞中にトンガといふ小群島がある。こゝの社會組織は古代日本のそれと非常に良く似た所があるとカリフオルニア大學博物館主事ギフオード氏はいつて居る。ギフオード氏はトンガ群島の人類學的研究に九ケ年を費し其の研究が最近「トンガの社會」と題し當地のビショプ博物館から出版された。それによると今から九百年ばかり以前日本人がトンガを始め南太平洋諸島一帶に移住して其の支配的勢力の一となつたものらしくトンガ及び共れに續くポリネシア及びミクロネシアの諸島には古代日本をしのばしめるものが多く政治に於て國王の外に國政をあづかつてゐる將軍や執權職などに相當するものがある。祖先を崇拜する風も厚く神の血統を引く後裔であることを誇りとし其の祖先を氏神として尊崇してゐる。それから國王乃至大酋長を山陵に葬る風も日本と同様である。神話、傳説などにも日本と一致する所が多い。然しトンガ地方では上下を通じて女性の勢力が遙かに男性を凌ぎ所謂嬶天下の社會となつて居る。そして男は臺所仕事から洗濯、耕作等の雜務に就き女は裁縫、機織等の所謂技術的な仕事を分擔してゐる。

九州を訛つたクサイ島
支倉の子孫が酋長
浮世離れて櫻の話

（ボナペ島にて秀島大毎特派員十九日發）十九日午前八時クサイ島に着いた。ボナペ以東は雨期に入つたのでこの日も雨にぬれて上陸、この島は北緯五度二十分南洋群島中一番赤道に近い、深い入江に火山岩の山が映つて綺の島、詩の島だ、白い砂濱も南洋では珍しい、在留邦人二十五名、島民千百名、無電のアンテナもないので時計の正確な時間も知らず聯盟脫退の問題にも神經をとがらせず至極暢氣な生活の樂園だ。こゝでは古くからキリスト教が普及してゐるので男は入墨をしてゐないし、女は服の下にシユミーズをつけてゐる、何よりも嬉しいのはこの島が日本に因縁ある事だクサイは九州の訛つたものでレロ島の城跡は水を引入れて濠を造つた築城法が日本人の手になるものと傳へられてゐる。その城跡を見て仙臺の支倉の子孫といはれてゐるレロ村の酋長シクラ君をおとづれる、レロ村二十一番地（ヘ三分で通り抜けられるやうな島にも番地がある）ジョン・シクラと標札のかゝつたカナカ人の家には珍しい二階建だシクラ君は數年前東京に來た事があるのでヤシの團扇を使ひ西瓜をかじりながら東京は今頃は櫻が奇麗だらうなどと浮世離れた會話をかはして午後三時この島にさよならを告げた。（以上、昭和八年四月大阪每日新聞）

（五）こゝに我が肥前の古代民族に就いて、諸家のご說を拜聽すると、斯うである。

一、喜田博士は

「九州地方の日本民族は、天孫民族が、先住土着の彌生式民族を同化融合したものである。その彌生式土器使用民族と云ふのは、北九州に居たもので魏志等に倭人と記すのが夫れである。此の民族は天孫民族の北方系統であるのと異り、南方系統に屬するもので、熊襲、肥人、隼、久米部等とは關係が最も深く彼の海部の如きも、之れと同一系統であつた。値嘉島の白水郎が、隼人に似て居るといふのもその爲めである」。

と說かれて居る。

二、古語學者の松岡靜雄氏は、國樔（栖）クズ、土雲（蜘蛛）といふものが、最古の住民で、穴居した者もあるらしい。熊襲のクマは土雲のクモと同語かもしれぬ。肥、火、夷又はヒラといふ文字で表された異俗の民族で、射術をよくするから、夷と譯したのでエビス、エミシはその別稱らしく、蝦夷といふ文字をあてる「ヒナ、ヒラ」は「ヒ」に接尾語「ラ」をつけたもので、原語「ヒ」に接尾語「イ」をつけた「イヒ」も、此の種族の呼稱に用ひられた。「アマ」は、支那では倭、我國では海人として知られた種族で九州を中心として、韓半島南部から、本州各地に分布した大種族である。

「キ」は木國（紀伊、杵島、基肄）に名が殘る外に、イキ、オキヒキ、アキ、シキ等の大支流あり、朝鮮では新羅（辰、之利）の「キ」即ちシラキとゝなへられた。高天原系又其支流賀茂族等も、一つの種族である。出雲大和に住んだものが有力であつた、云々と。以上は播磨、常陸風土記物語や、日本古俗誌、日本言語學等を參照しこの話であると本人は云つて居られる。

三、又、橋詰武生氏は次の如うに語られて居る。

「紀元二三世紀（西暦）頃の筑紫地方は、既に各地に聚落が發達して、それが有明海灣沿岸地方、筑前沿海地方、日向地方には、夫々大部族小國家があつたであらう。そして筑紫人の仲間には言葉が出來上つつて居たであらう、勿論中には天孫族に頑强に反抗し、隼人族（印度ネジア）の如く、融和し切れない異種族と若干は邊陬に集團してゐたであらうが大體に於て天孫系に壓迫され、或者は滅び、或者は同化したらしい」。と

第七章　所謂ドルメンの分布の此地に多いのは何を物語るものか

（一）從來鬼塚、鰐塚、鬼の岩屋等と稱されて居た東松浦郡神集島のドルメンも、先年白鳥文學博士から「之れは全くドルメンの正體である」との折紙が付いて、爾來ドルメン翁の佐藤林賀氏は愈々力を得て、此の方面の研究中であるが、既に壹岐國等に於ては奥行三十尺から四十尺のが三四十も見付かり、又小さいのになると昔は三百余も數へて古來鬼の國、鬼の子孫の名に背かないことを確め得られたと云ふのであり尚筑前福間の宮地嶽奥院のドルメン（長サ九十尺、高サ十一尺）の如きは、確かに世界第一だと云はれる等、此の北九州は我が國內でもドルメン分布の、最も多い土地であるが、就中我が佐賀縣に於ては殆んど全地上にドルメン網を敷いた如うな姿で大小精粗は勿論あるが、特に神埼、小城、杵島の三郡に亘つてはザラに存在して居る。

（二）一體ドルメンはアイルランド語でセンチリー（書籍名）に依ると、ドルは机メンは石で英語の所謂テーブル、ストン即ち石机の意である。尤も朝鮮總督府古墳調査課長小田氏の如き、此の語はケルト語であると云つて居る。但し朝鮮では之れをホエンドル即ち廣い石と云ふ意味に呼んで居る。尚ほ滿洲では瓦房や石棚と云ひ、位置形狀から口石、帽子石等の名もある如うである。

西洋の辭書に據ると、

「一大天然石が、二つ以上の石の上に安置されたもので、一種の棧橋の如うなものである。云々」と。尤も多數の岩石を以て構造せられたものもある。

尚ほ西洋の書物に據ると、

「古代人種の住所に象つて造つたものである」。ともある。

(三) 伊藤林賀氏は「此のドルメンは墳墓ではなくて、その靈魂は不滅であると云ふ思想から出來たもので、一言で云へば神祠である」。と云はれるのである。

良吾思ふに佐藤氏の説一理はある如うだが私は神祠之れ墳墓即ち奥津城である、而して之れその多くは吾々の所謂、横穴式の古墳である。而して此の古墳の分布を見ると、矢張豊州から次で我が佐賀縣に最も多く福岡縣大分縣等之に次ぎ彼の日薩隅の如き此種の古墳は比較的少いと云ふに至つては、抑も何を物語つて居るものであらうか、此のドルメン式横穴古墳は、佐藤翁の説に依れば既に四、五千年を經過してゐるもので、その系統を探究すると、その根源の地が中央亞細亞で夫れから三方面に分れ、その一は印度から南洋に渡り我國に入り一は西藏、蒙古、滿洲を經、一朝鮮から對馬、壹岐を經て我國に入つたものである、我が高天民族の移動を、南洋方面六分、滿鮮方面四分位等云ふのも、此等の説に基くものだと思はれる。而して我が日本人が漸々黄色人種即ち支那人等と異なる所以、亦その根據地が中央亞細亞にあつて、寧ろ地中海沿岸の英・瑞・丁等と、同人種であることを仄めかしてゐるのも面白い現象であると佐藤氏は語られるのであるが、此の點に對しては私共は全然賛意を表することは出來ない、否寧ろ別述する如うに、同人種としての形跡がそこに存するものとせば、それは我が國をこそその根源と稱すべく、蓋し之れ主客顚倒の論議だとも謂ふ可きである。

印度に於ける最古王國の古傳に、その祖先が葦船に乗つて東海から來着した等のことがあり、我が古事記の蛭子の記事等と參照する時、私は現在の世界は、此の豊葦原の中つ國とそ眞に地球に國を爲すものゝ中心國で、夫等の國の發祥地であると思料するものである。

殊に此等の所謂ドルメンに就いての傳説に、

「大古、火の雨が降つた時に、之れに隱れて火難を免れた」等から思索をめぐらすと、太陽の如き造化の祖神が此の日本國に出現ましまして、四方に君臨せられたことを暗示してゐると云はねばならない。

火は日に通じ別述してゐる如うに、日神の出現を表はしたことは申すまでもない所である。

第八章　肥國には尚澤山の古代語が殘されて居る

(一) 琉球で現に使用されつゝある古語で肥前に共通せるものゝ四、五の例は、前に述べた通りであるが、更に此の肥前に現在使用されつゝある言葉即ち普通方言だとして擯斥されつゝある言語の中には極めて多くの古代語を存することは抑も何を意味し、何を物語つて居るものでありませうか、私は彼の熊襲のことにしても、唯無稽に之を云爲したものでは無い、事實が然か有ることだから致し方が無いのと同樣、玆に私共は千萬の論議よりも、之等の方言の嚴存することが何より先づ有力な證據ではあるまいかと思ふ。

(二) 蓋し此の擯斥されつゝある、吾等の方言こそは古代日本の文化が此處に胚胎し發祥してゐることを立證する唯一の無形の金字塔だと私は信ずるのであります。

貞享五戊辰年に、神雒銅駝坊書肆村上平樂寺重梓の中臣祓瑞穂鈔下に、

「小キ木ノ枝ヲ金木ト云フ事ハ、今マ以テ奥州ノ俗云フト、或人ノ語シ也。神代ヨリノ和語ハ邊土ニ殘リ、中國ハ、其時々ニ俗モ變ズル故ニ、神代ノ遺風ハ、猶モ邊土ノ野人ニアル也、先進ノ於二禮樂一野人也トノ聖言モ今マ更ラ思ヒ合ラレ待ル」。

とある、全く我が意を得たりと謂ふ可きである。

九大法文學部講師吉町義雄氏は、その「西國ばいの過去帳」(昭和八年五月福日紙上發表)に、次の如く所見を掲げてゐられる。

「日本の在り餘る文獻の中に占める筑紫言葉は、こよなく愛らしいものである事を沁々味はひつゝ過去二箇年を自分は靜かに過ごした。中央學界のそれ〴〵の玄人達が、恐らく一顧をも與へてゐない樣な点に數百年前の文筆業者の苦心と趣向とを、獨り賞玩し得る境遇に感謝しなければならないのであつた」云々。

と、更に最後に氏は、

「三百年の傳統を有する是等九州三大方言文學資料は、新興東京語を主とする標準語の前には、矢張り寧ろ根を枯らされて行くのではあるまいか」。

と云つてゐられる。三百年の方言でさへ斯の通りである、況んや純粹古語の現在殆んど絶滅せんとしつゝあるに於てをやである。

(三) 古典語で、今日肥前地方の世に所謂方言なりと輕視せられつゝあるものを表示せば實に次の通りに盛澤山ある。

アの部

あぐら(胡床)、あぐらかく、あげた(高田)、あげまき(總角)、あざわらふぞ(嘲咲者也)、あしたに(旦時)、あしば(足場)、あす(明日)、あぜ(畔)、あたま(頭、顚)、あたらし(惜)、あたり(傍)、あづき(小豆)、あに(兄)、あね(姉)あは(粟)、あはがら(粟萁)、あはしま(淡島)、あはせ(合)あはれ(阿波禮)、あふ(遇)、あぶみ(鐙)、あぶら(脂)、あま(海人)、(あみ網)、あむ(編)、あやつ(方言)、あやふし(危)、あやまてる(過)、あゆ(年魚)、あゆむ(歩)、あよぶ(歩、方言)、あら(阿良)、あらめ(荒布、滑海藻)、ありく(歩行)、あわ(沫)、あわゆき(沫雪)、あゐ(藍)、あをむ(青)、等。

イの部

いあてゝ(射)、いか(嚴)、いが(伊賀)、いかさまに(如何)いかして(活)、いかに(奈何)、いかめしく(嚴)、いかりて(怒)、いきかへる(生返)、いく(活)、いくさ(軍)、いこひ(息)、いざ(伊邪)、いそ(礒)、いたみて(痛苦)、いちいち(一々、俗言)、いちどきに(俗言)、いちのはし(一端、俗言)いちひ(櫟)、いちひのき(赤檮)、いづく(何處)、いでむかへ(出向)、いとこ(從父母兄弟)、いながらに(伊那賀良爾)いね(稻)、いのち(命)、いはゆる(所謂)、いふ(謂)、いはぬ(石根)、いへ(家)、いま(今)、いまさらに(今更)、いまに(於今者)、いまは(今者)、いめ(夢)子供の言葉に多し、いもうと(伊毛宇止)、いろこ(魚鱗)、いんまに(今に、俗言)等。

ウの部

うゑき(殖木)「萬葉」、うかがひ(伺)、うきせ(苦瀨)、うけとり(受取)、うさぎ(菟)、うし(牛)、(大人)、うしほ(潮)うしなふ(失)、うす(臼)、うづく(疼)、うすにつき(舂)、うた(歌)、うちころす(拷殺)、うちやげ(方言)、うづだかき(宇豆高、俗言)、うつはもの(宇都波物)、うで(腕)、うまご(孫)、うまし(宇麻志)、うまる(生)、うらはづかし(心恥)、うるはし(善、麗)、うろたゆ(俗言)、等。

エの部

えだ(枝)、えらい(俗言)、等。

オの部

おくて(晩稻をも云ふ)、おくやま(奥山)、おこなふ(行)、おこり(興)、おし(忍)、おしふせ(押伏)、おそろしき、おつ(落)、おつづけ(俗言)、おとこ、おとぼ(季子)、おどろく(驚)、おに(鬼)、おにかみ(鬼神)、鬼塚、おのづから、おのれ(己、俗言)、おひ(負)、おひいだし(追出)、おひかぜ(順風)、おひしきて(追近)、おひつく(追着、俗言)、おひゆき(追往)、おふ(負)、おふせ(仰)、おふて(追手)、おふを(大魚)、おほひ(大)、おほいし(大石)、おほうら(大浦)、おほかた(凡)、おほきすくなき(多少)、おほきみ(天皇)、おほし(大)、おほす(成長せしむ)、おほしま(大島)おほせ(負)、おほせて(仰)、おぼれ(沈溺)、おほわたり(大渡)、おまへ(御前)、おめおめ(のめのめまざまざ)、おもひ(思)、おや(祖)、おやこ(祖子)、おやぢ(夫、俚言)、おらぶ(泲羅夫、叫)、おろし(山より吹きおろす寒風)、おれ(爾、儞)、おろそか(疎)、等。

カの部

かかげ(搔上)、かき(垣)、かき(搔)、かぎ(鉤)、かくし(隱伏)、かくて(仍)、かけ(翠)、かけり(翔)、かこ(水手)かざ(風)、かし(樫)、かしこし(恐)、かしこまりました(俗言)、かしこむ(加志許牟)、かしは(柏、槲)、かしはで(膳夫)、かしら(頭)、かたな(小刀)、かたびら(帷)、かたへ(傍)、かぢ(鍛治)、かぢ(楫、艫)、かぢとり(梶取)、かちより(自歩)、かつがつも(加都賀都毋)、かづら(鬘)、かつを(堅魚)、かて(勝)、かど(門)、かぬち(鍛人)、かはせみ(川世美)、かはのぼり(迦波能煩理)、かへす(歸)、かほかたち(姿容)、かま(蒲)、かま(釜)、かみ(神)、かみ(髮)かみしも(上下)、かみなり(雷)、かみよ(神代)、かむぬし(神主)、かや(茅)、かよはむ(往來)、からうす(碓)、からき(枯樹)、からめて(搦手)、かり(鴈)、かりみや(假宮)、かわく(乾)、等。

キの部

きこゆ(聞)、きせて(服)、きたなきこゝろ(黑心、悪心)、きたり(服)、きつ(吉)、きど(木戸)、きもの(衣服)、きやつ(俗言)、きる、きれ(斬)、等。

クの部

くき(莖)、くぐる(久具流)、くさ(草)、くそ(屎)、くそまる(送糞)、くそまり(屎麻理)、くだもの(菓)、くだり(行・章・段・條)、くちなし(梔)、くちなは(蛇)、くど(竈、俗言)くに(國)、くぬぎ(櫪木)、くひ(杙)、くひ(喫)、くび(頸)くびり(絞)、くぼた(下田)、くま(熊又は久麻、久萬)、くまそ(熊曾)、くまの(熊野)、くみて(酌)、くら(闇)、くら(鞍)、くらげ(海月)、くるしむ(患惚)、ァくるひ(明日)、くろ(黑)、くろた(黑田)、くろだい(黑鯛)、ぐわむらい(元來、俗言)、等。

ケの部

けがれ(汚垢、穢)、けさ(今旦)、けづる(梳)、等。

コの部

こ(故)、こ(子)、こ(海鼠)、こいつ(俗言)、こえ(越)、こけ(苔)、こしかく(腰懸、俗言)、こじる(俗言)、こて(小

手)、こども(子弟、僕從)、ことわざ(諺)、このみ(木實)、こま(駒)、こも(菰)、こも(薦)、こもり(籠り)、こよひ(今夜)、こらへる(忍、俗言)、これ(是)、等。

サの部

さ(早)、さあ(俗言)、さい(栄、俗言)、ざい(在)、さかえ(栄)、さかき(賢木)、さかさま(逆)、さかづき(酒杯、盞)、さかづきごと(盃事)、さかひ(境、堺)、さき(末)、さき(拆)、さぎ(鷺)、さく(柝)、さくら(櫻)、さぐる(探)、さけ(酒)、さざえ(栄螺)、ささげ(擎)、ささば(小竹葉)、さし(刺)、さしとほす(刺通)、さしむかひ、さしわたし(指度)、さす(刺)、さだむ(定)、さち(幸)、さとし(覺)、さなへ(佐苗)、さま(狀)、さみだれ(佐亂)、さむらい(侍)、さら(皿)、さらに(更)、さらば(さいば 俗言)、さる(猨)、さわぐ(騷)、等。

シの部

しし(猪、鹿)、したがふ(從)、しただる(垂落)、しつかり(志加理)、しづく、しづまる(鎭)、しづむ(沈)、しに(死)しぬびに(竊)、しぬぶ(思・偲・慕)、しほ(鹽)、しぼる(絞)しま(嶋・島)しまし(しばし 暫)、しみづ(清水・寒泉)、しらか(白髮)、しらみ(虱)、しり(尻)、しりぞく(退)、しりへ(後)しろ(素・白・代・城)、しろびと(しろうと 白人)、しろもの(俗言)、しん(神)、しんたう(神道)、等。

スの部

す(洲・簀)、すがた(姿)、すすむ(進)、すずめ(雀)、すそ(襴・灌)、すでに(巳)、すなご(砂)、すなはち(即)、すね(足、俗言)、すべて(凡)、すまして(清流)、すみ(隅)、すみか(住所)、すみのえ(住吉、墨江)、すゑ(子孫)、すめらみこと(天皇命)、等。

セの部

せきて(塞)、せむしうばんざい(千秋萬歲、俗言)、ぜんぜんに(漸々、俗言)、等。

ソの部

そき(曾伎)、そく(足)、そこ(底)、そこ(其地)、そこより(自其處)、その(其)、そのところ(其地)、そののち(然後)そへ(副)、そやつ(方言)

タの部

だい(大)、だいこくばしら(大黑柱)、だうそ(道祖)、たか(高)、たか(鷹)、たかやま(高山)、たから(珍寶)、たく(栲)、たけ(長)、たけのは(竹葉)、たけを(竹矢)、たすき(襷)、ただ(唯)、たたして(發、立)、たたみ(疊)ただよへる(多陀用幣琉)、多々良、たち(大刀)、たちおれ(俗言)、たちばな(橘)、たちより(立依)、龍、たつ(献)、たてぐ(建具)、たてまつりる(進・貢進・奉・獻・立奉・貢奉)、たな(板擧・棚)、たなばた(棚機)、たばかる、たはけ(奸・婬)たびら(平)、たふとし(貴)、たま(玉)、たまぐし(玉串)、たまはる(給・賜)、たむけ(手向)、ために(爲)、たりき(椽)たれ(垂)、たれぞ(誰)、丹波(栗)、等。

チの部

ち(知・智・千・血・乳・遲・地)、ちぎ(千木)、ちどり(千鳥)、ちまた(衢)、ちよろづ(千萬)、ちらす(散)、等。

ツの部

つ(津)、づ(豆)、ついでのままに(以次第)、つか(柄)、つかさ(首)、つかはす(遣、使)、つかひもの(使者)、つかふ(使)、つかへ(仕)、つかむ(搔、掬)、つき(杯)、つきあたる(突當)、つきかへし(衝返下)、つきたち(月立)、つぎなへ(繼苗)、つぎに(次)、つく(附)、つぐ(告)、つくし(筑紫)、つぐなはぬ(不償)、つぐのひ(償)、つくらひ(修理)つくり(作)、つくりかたむ(修理固)、つくりはじめ(初作)つくろ(修理)、つくゑ(机・案・几)つけ(附)、對馬、つたひて(傳)、つち(地・土)、つち(椎)、つちにおる(下地)つちをほり(掘土)、つつ(筒)、つつのを(筒之男)、つつみ(堤)、つづみ(鼓)、つづら(黑葛)、つどひ(集)、つな(綱)、つねに(恒)、つばき(液)、つはもの(兵)、つばらかに(委曲)、ついに(遂)、つぶさ(具)、つめ(爪・抓)、つまる(俗言)、つむ(採)、つもりて(累積)、つら(頰)、つる(都留)、つるぎ(劒・劍)、つれあひ(俗言)、つりばり(釣・鉤)、つゑづき(杖衝)、等。

テの部

て(手)、でいり(出入)、てうちて(手打)、手さき(俗言)、てをの(手斧)、てん(天)、天竺の國、等。

トの部

と(戸・門)、どいつ(俗言)、とかくに(俗言)、とき(解)、とき(時)、ときは(常磐)、とく(說・得・解)、とこのべ(床前)ところ(所)、とし(年)、とし(穀)、とつか(十拳)、とつぐ(嫁)、とどろ(動響)、となり(隣)、とばり(帷幕)、とびさる(飛去)、とぶとり(飛鳥)、とほして(通)、とほり(通)、とみ(富)、とも(伴)、ともがら(族)、ともびと(從者)、とよ(豊)、とり(鳥)、とり(取)、とりさがり(取懸)、とりもち(取持)、どろ(泥)、

ナの部

な(名)、「さか」な(魚)、な(栄)、なか(中)、ながさ(長)、ながしき(流)、なき(哭)、なぐ(和)、なくなり(泣)、なげき(歎息)、なげく(歎)、なづく(名)、なほす(直)、なみ(浪)なみだ(涙)、涙ぐむ、なめ(滑)、なやむ(惱)、ならす(鳴)なりて(化)、なりて(臨)、なる(成)、

ニの部

にぎりひしぎて(搤批)、にげかへり(逃還)、にげさり(逃退)にげて(逃亡)、にはかに(倏忽)、にはかに(急)、にはつとり(庭つ鳥)、にひきだ(新分)、にふの(丹生)川、等。

ヌの部

ぬ(寐)ル、ぬし(主)、ぬらす(洽)、等。

ネの部

ね(根)、ね(寢)、ねがふ(願)、ねき(禰宜)、猫、ねこじにして(掘・拔取)、ねずみ(鼠)、ねど(禰度)こ、ねば(器ぐ)ねもころ、等。

ノの部

のぞむ(臨)、のち(後)、のどか(能杯加)、のはら(之原)、のぼる(上)、のりて(乘)、のりと(祝詞)、等。

ハの部

ば(場)、はかま(褌、袴)、はかり(謀議)こと、はし(橋・箸・端)、はじ(櫨)、はじ(土師)、はしかけ(橋懸)、はじめて(初・始而)、はじめて(及)、はしら(柱)、はしり(走)、はぜ(櫨・黄櫨・俗言)、はだか(裸)、はたち(廿)、はた(他)、はたらく(他を樂にする意)、はち(鉢)、はつこ(子孫)、はつせべ(長谷部)、はつもの(初物)、はて(意・盡)、はな(鼻)、はな(花「櫻」)、はなたちばなは(波那多知婆那波)、はなはだ(甚多)、はなれ(離)、はばかり(憚)、ははき(帚)、はひ(匍匐)、はふらかす(放)、はま(濱)、はまぐり(蛤)、はや(速)、はやし(林)、はら(原)、はら(腹)、はらひ(禊)はり(鉤・針)、はる(張)、はるばろに(遙)、

ヒの部

ひ(日)、ひ(檜)、ひ(肥)、日向、ひうち(火打・燧)、ひえのやま(日枝山)、ひかげ(日影)、ひきいだし(控出)、引づる(俗言)、ひきよせ(控依)、ひげ(須・揚・鬚)、ひこ(比古)ひこ(曾孫、俗言)、ひこ(日子)、ひさこ(瓠)、菱、ひじり(聖)、肥前國河上宮、ひだり(左)、ひつぎ(柩)、ひつぎのみこ(日嗣御子、皇太子)、ひぢ(肘)、ひよつく(偏)、ひとところ(一所)、ひととせ(一年)、ひとま(一間)、ひとりひとり(一人々々、俗言)、ひとりまへ(一人前、俗言)、ひな(鄙)、ひのかは(肥河)、ひのきみ(火君)、ひのくに(火國肥國)、ひのみちのくち(肥前)、ひびく(響)、ひひこ(曾孫)ひむかし(東)、ひむか(日向)、ひめ(比賣)、ひもろぎ(神籬)ひよし(日吉)、ひらく(開)、ひれ(比禮・領布)、ひれ(鰭)、ひろ(尋)、ひろめ(昆布)、びんづら(鬢頬)、等。

フの部

ふき(布枝)、ふくめい(復命)、ふくろ(俗・嚢)ふさ(布佐)ふさはず(不良)、ぶし(節)、ふたぎ(塞)、ふたごにうむ(雙生)、ふたり(二人)、ふじのはな(藤花)、ふと(太)、ふところ(懐)、ふなはら(船腹)、ふねかち(船楫)、ふはふは(俗言)、ふはり(俗言)、ふみて(跳)、ふらして(零)、ふり(振)、ふりたて(振立)、ふりわけ(布理分、俗言)、ふる(觸)ふる(振)、等。

ヘの部

へ(邊)、へ(竃)、へそ(閇蘇)、へつひ(竃)、へて(經)、へび(蛇)、へみ(蛇)、へむび(蛇)、等。

ホの部

ほ(穗・火)、ほう(奉)、ほがひ(壽・祠・樂・祭・祝)、ほぎうた(本岐歌)、ほぐ(祝)、ほこ(矛・戟)、ほさず(不乾)、ほしき(本志・富須・乾)、ほとところ(懐、方言)、ほとほと(殆)、ほとり(上)、ほほづき(酸醬)、ほやけ(火燒)、ほら(富良・洞)、ほりえ(堀江)、ほりたて(堀立)、ほる(堀)ほろぼしてむ(滅)、等。

マの部

ま(麻)、ま(眞)、ま(間)、まうしあぐ(申上、俗言)、まうで(參出)、まが(禍)、まかし(擢)、まがり(勾)、まかる(罷)まかる(禍)、まかれる(任)、まくら(枕)、まことに(實・信)まこも(眞菰)、まさかの時(俗言)、まさかり、まさりて(益)ましき(坐也)、まして(益)、まじなひ(咒術・呪、俗言)、ましまし(坐)、また(又)またぐら(髂)、またのひ(明日)、またむかし(又昔)、まちさけ(待酒)、まちとれ(待取)、まちむかひ(待向)、まづ(且)、まづ(先)、まつり(祭)、まつりごと(政)、まつる(奉)、まで(以前・麻傳)、まな板(俗言)まに(麻邇)、まにまに(隨)、まへ(前)、まへがみ(前髮)、きへまへ(前々)、まめ(大豆)、まもりがたな(守刀)、まもる(麻毛流)、まいる(參)、まゆみ(麻由美)、まり(麻理)、まる(麻留)、まる(全・圓)、まをし(白)、まん(滿)、まんなか(眞中)、等。

ミの部

み(御)、み(美)、み(見)、み(己・身)、みあひて(娶)、みいくさ(御軍)、みあへ(御饗)、みおび(御帶)、みおや(御祖)みおれ(俗言)、みかしら(頭)、みかた(御方)、みかつき(三日月)、みかづら(御鬘)、みかばね(御骨)、みかみ(御髮)みくし(御髮)、みくび(頸)、みくりや(御庖厨)、みけ(御膳・御饌)、みこ(御子・子・王子・孫)、みこころ(御心)、みさき(埼・崎・碕・岬)、みささぎ(御陵)、みさとし(教覺)、みさをに(守志)、みせて(即示)、みぞ(溝)、みぞうめ(埋其溝)、みそぎ(美曾岐)、みたて(見立)、みたま(御魂)、みため(御爲)、みたりして(三人)、みだれ(亂)、みち(道)みつぐ(俗言)、みづもち(水持)、みつゑ(御杖)、みてぐら(幣・幣帛・御手久良・充座)、みとせ(參歲)みとも(從)、みどりいろ(綠色)、みな(並)、みな(各・皆)、みなか(御中)、みなと(水戸)、みなみだ(涙)、みなみな(皆々)、みにくき(凶醜)、みは(御齒)、みはか(陵)、みぶ(壬生)、みふね(御船)みみ(耳)、みめひ(姪)、みや(宮。御屋)、宮ノ浦、みゆき(行幸)、みよ(世)、みをば(姨)、等。

ムの部

むかで(呉公)、むかひ、むかもも(向股)、むぎ(麥)、むく(椋・椋子)、むけ(向・平)、むす(烝・生)、むすこ(男)、むすびの神、むだ(徒・空)、むつ(親)、むね(胸)、むまご(孫)、むろ(室)、等。

メの部

め(芽)、め(女)、め(海布)、めくはし(目微)、芽ぐむ、めぐりて(還・廻)、めし(飯、俗言)、めす(召)、めとる(娶)、めひ(姪)、めんめんの(面々之、俗言)、等。

モの部

も(喪)、もえあがるもの(萌騰之物)、もし(或・若)、もたげ(持上)、もちて(以・以而)、もつ(持)、もと(本)、もとどり(髻・頂髮)、ものいふ(物言)、もののふ(物部)、もはら(専)、もも(桃子)、もむ(鑽)、もり(杜)、もろともに(一時共)、もろひと(諸人)、もろもろ(諸)、

ヤの部

や(八)、や(夜)、や(矢)、やあ(咄嗟)、やうか(八日)、やうやうと(俗言)、やがて(即、俗言)、やから(族)、やぎ(夜藝)、やさか(八尺・八坂)、やしろ(社)、やすく(安・平)、やすみ(病)、やそ(八十)、やつか(八拳)、やつかれ(僕)、やつこ(奴・賤人・賤奴)、やつめのあらこ(八目之荒籠)、やなぐひ(靫・箙)、やね(屋、俗言)、やひろ(八尋)、やぶりて(破)、やぶる(毀)、やへ(八重)、やほ(八百)、やま(山)、やまかは(山川)、やまがた(山方)、やまざき(山岬)、山下日影、やましろ(山背・山代)、やまた(八俣)、やまだ(山田)、やまと(和・山戸・大和・山門)、日本武尊、やまぬ(山野)、やまのかみ(山神)、やまのくち(山口)、やみこやせり(病臥在)、やむ(病)、やや(稍)、やよひ(三月)、やらふ(夜良布・逐)、やり(矛)、やる(遣)、やれこぼれて(破壞)、やをとめ(八稚女)、等。

ユの部

夕さり(俗言)、ゆき(行)、ゆきおつた(俗言)、ゆきおれ(俗言)ゆきかふ(往來)、ゆくへもみえず(即不見共所如而)、ゆすりて(動而)、ゆする(梳)、ゆづり(讓)、ゆばり(尿・由婆理)、ゆひ(結)、ゆふ(木綿)、ゆふされば(由布佐禮婆)ゆまり(尿)、ゆみばり(玄)、ゆゆし、ゆらく(由良久)、ゆらゆら(由良々々)、ゆるき(震)、ゆるせ(除)、等。

ヨの部

よ(世)、よからす(不良)、よき(端正)、よく(沐)、よくこそ(能許曾)、よこさま(邪)、よしあしきらひもの(吉凶棄物)、吉田、吉野、よそひ(裝束)、よそふ(余曾布)、よだり(唾)、よつばり(遺尿、俗言)、よばひ)結婚・將婚・欲婚)、よびあげ(喚上)、よびよせて(喚歸)、よむ(讀)、よめ(婦)、をよぶ(俗言)、よも(四方)、よものくに(四方國)、より(依・自・從)、よりくる(歸來)、よりて(因)、よるのいめ(夜夢)、よるひる(晝夜)、まろづ(萬)、よろづのかみ(萬神)よろひ(鎧・甲)、等。

ラの部

ら(等)、らし(良斯)、等。

リの部

りやうじん(兩神)、龍燈等。

ルの部

る(流)、等。

レの部

れい(例)、れい(令)、等。

ロの部

ろむご(論語)、等。

ワの部

わ(輪)、わか(稚・若)、わが(和賀)、わかき(稚・幼)、わがきもの(我衣服)、わかくさの(和加久佐能)、わがこ(我子)、わかし(幼・稚・和迦志)、わかめ(稚海藻・和布)、わきざし(脇差)、わく(滿・涌)、わけ(別)、わざはひ(妖氣)、わずかに(纔)、わすらして(忘)、わせ(早稻)、わた(綿)、わたす(度)、わたつくり(造綿者)、わたり(渡)、わづらふ(煩・和豆良布)、わな(羂)、わななきて(和那々岐氐)、わに(和爾・鰐・丸邇)、わびて(和備弖)、わらは(童)、わらふ(咲)、われ(俗言)、われども(和禮共)、等。

ヰの部

ゐ(井)、ゐ(猪)、ゐさめ(居寤)、ゐせき(韋世伎・井關)、ゐて(居)、ゐね(率寢)、ゐのこ(猪)、等。

ヱの部

ゑ(餌)、ゑらぐ(歡喜咲・喜良具)、等。

ヲの部

を(穢)、を(麻)、を(夫)、を(於)、を(緒)、を(遠)、を(尾)、を(小)、をうと(夫)、をがは(小河)、をがむ(拜)、をさ(長)、をさき(尾前)、をさむ(治)、をさめまつり(葬)、をたけび(雄誥・男建)、をしもの(食物)、をだて(寶陀弖・小楯)、をぢ(老翁・伯父・從父)、をつと(夫、俗言)、をど(小門)、をとこ(壯夫・男・袁登古)、をとひめ(袁杼比賣)、をとめ(袁登賣・處女・童女・美人・媛女・孃女)、をなめ(妾、方言)、をのへ(尾上)、をば(姑・姨)、をばま(小濱)、をはり(尾張)、をぶね(小船)、をへ(意)、をみな(婢・女)をり(折・居)、をろち(遠呂智・蛇)、をんな(女人)、等。

數へ來れば實に枚擧に遑無い位である、勿論此外にも尚ほ日用使用しつゝある古語が澤山あるので、私は之を思ふ度に我等の祖先が今日まで此等の古語を傳へて呉れて居たことを感謝せずには居られない氣がする

(四) 佐賀縣刑事課で調べた方言の蒐集(犯罪捜査の資料に)にしても、此の中には隨分立派な古語が含まれて居るのである。

佐賀縣刑事課では犯罪資料の一端に資するため、かねて縣下に流布される方言の調査方を各警察署に通達してゐたが最近その全部の回答が集まつた左はその方言の一部である

△ゼンナク(餘計ナ事)△ギヤーケ(風邪)△ヌカシタ(言ツタ)△ドッサイ(澤山)△セツカ(蝿)△テンゲー(手拭)△バクリユー(牛馬商)△ヨソワシカ(恐シイ、キタナイ)△ヒヤア(蝿)△ノスツボー(怠惰者)△カラスミ(木炭)△ナマイシ(石炭)△アイドン(ソレデモ)△リツパカ(奇麗)△バボー(下男)△イケト(直接)△イビル(肴ヲ燒ク)△ヘーサイ(ゴモットモ)△ウセロ(行ケ)△オツタン又オトン(オ前)△トーバタ(凧)△コスカ(狡猾)△ヒダルカ(空腹)△ゾーノワク(腹立)△ボーブナ(南瓜)△ハバクラシメテ(一生懸命)△コゼンボー(産婆)△キタンボラツカ(不潔)△チヤボ(浴場)△オグル(詐欺)△シロモン(良キ娘)△オトテー(一昨日)△サキオトテー(一昨々日)△ヒラアガリ(中食)△ゴットイ(常ニ)△ジョウラ(妻)△上門(娘)△ウンガ(貴様ガ)△スツバイ(皆ンナ)△オケタン(桶屋)△オンヂー(伯叔父)△カラウ(負フ)△フーケモン(馬鹿)△ナーイ(承知シタ)△エスカ(恐シイ)△イーシ(唖者)△ナイキヤー(何ダ)△グゼゴト(小言)△ワイガ(君ガ)△ソイジヤー(左様ナラ)△ソイバツテン(ソウダケレドモ)△カンショウ(精神病者)△エタ(貰ツタ)△アルカンター(有リマスカ)△ウチンニキ(郷里)△バツテンガ(ケレドモ)△ジージー(酒)△ゴゴサン(娘サン)△ノスカイ(賣婦)△カヽサン(母様)△オンボサン(祖母)△バーサン(見上)△シヤンス(情婦)△ベーベー(肴)△インニヤー(否)△アンマイ(餘リニ)△ヒリユウトリ(日傭稼)△セカラシカ(煩サイ)△キンサイ(オイデヨ)△知ランバンター(知リマセン)△寄ランカンター(寄リナサイ)△イマナキ(建)△イチリー(親戚)△ホメク(炎暑)△ヘグラ(釜ノ煤煙)△ノスツボー(放蕩者)△フンミヤア(御馳走)△ゼンモン(乞食)△ロクソーカ(横着)△ホゲタン(穴)△イマナキ(蓆)△ト、シカ(愚鈍)△アサン(君)△コッチヤーモン(厄介者)△ベ、ンコ(牛ノ仔)△ヘンドー(巡禮)△エンチ(我家)△アオモチ(情婦)△モツサン(情婦)△クルウ(叱タ)△ドロンサン(雷)△シロモン(ヨイ娘)△チヤーガッカ(恥シイ)△オトン(オ前)△ワサン(オ前)△バツキー又はオバッチャン(伯母)△ドンガイコノ(馬鹿野郎)

第八章　全く我が火の國が日本文化の源泉である

ことは、此の一事を眺めても明かに立證することが出來る。

(一) 我が西肥前の地には、前述の如く記紀萬葉の純日本語が斯くも多く遺されて居るのみならず先住民だと私共が蔑視して居るアイヌ人の言語が又極めて多分に殘存するのである而も之れが今日では誰一人として怪しむものが無い迄に全く同化され切つて居るのも面白い。勿論現在アイヌ人が使用して居る言葉の中にも之亦元々日本語から來たのではないかと思はれるものも多少ある如うである。

(二)

	日本語	アイヌ語
1	磯(海岸の岩)	イソ
2	岩	イワ
3	鉢	パチ
4	馬	ウマ
5	口	クチ(喉の義)
6	手	テ(或はテク)
7	酒	サケ
8	神	カムイ
9	茶	チヤ(日)
10	錠	ショウ(日)
11	鉋	カンナ(日)
12	駕	カンゴ(日)
13	金(鐵)	カネ(或はカキ)
14	樏	カンチ(日)
15	金槌	カニツケ(日)
16	手拭	ハチマキ(日)
17	痲疹	ハシカ
18	鷹	タカ
19	小豆	アンツキ
20	祝	イワイ
21	骨	ボネ
32	猫	メコ
23	昆布	コンブ
24	笠(傘)	カサ
25	上り(山)	ヌプリ
26	母	ハボ
27	風俗	プリ
28	幣	ヌサ
29	量る	パカル
30	箸	ハスイ

31 猿(さる)　サロ(日)
32 鹽(しほ)　シボ
33 鐵瓶　カマ(日)
34 大庖丁　ナタ
35 粉　コ
36 童(わつぱ)(小童(こわつぱ))東北音　ワツパ
37 童(わらべ)　ワツパ
38 蠢(うご)めく　モヨモヨ
39 馬鹿　バカ(日)
40 藥(くすり)(溫泉)　クスリ
41 螇蚸(ばつた)　パタ
42 苫(とま)　トマ
43 やい(呼ぶ聲)　ヤイ
44 橇　ソリ
45 珠(たま)　タマ
46 列(つら)(數へ方)　ツラ
47 愛女(めのこ)　メノコ(女)
48 野地(やち)(沼地)　ヤチ
49 銛(やす)　ヤス
50 刈(か)り取る　カル
51 富士(ふじ)山　フヂ(火)
52 野(の)　ヌツプ

(三)　東京の大學を出た某學士が曾て私に次の如うなことを語つたことがある。

「地方の中學等で學ぶ時は何も左樣な感じはしなかつたが、東京に出て。初めて我が鄉土の言葉（普通方言だとして目下矯正されつゝあるもの）の中には、多分に記紀萬葉から鎌倉頃までの言葉が使はれつゝあることを悟つた。古事記や書紀は勿論、萬葉集から平安物語徒然草等が、私等には極めて容易に解せらることでも、關東や東北地方の學生には、餘程六つかしく解せられて居るらしい有狀で、明瞭に見ゆるのである。

之れから考へると、我が九州地方、特に鄉里佐賀の地は隨分上代に於て相當文化の域に達して居たものと思はれる。言ひ換ゆれば日本文化の源泉地は此の火國ではあるまいかと考へられるのである。云々」。

と聽かされたことを今に記憶して居る。尤も平家物語や徒然草等の平安から鎌倉に亙つて流行した語句は勿論京や關東がその發祥地であるに違ひ無いが、特に我が鄉土には、領地の關係や流人等の交涉が多かつたことは、顯著な史實で、その結果が茲に殘されて居るものと云はねばならぬ。

（四）　尙ほ此の肥前には、長崎、平戶等他に見ることの出來なかつた、支那や葡蘭關係の土地柄丈け、之等の言語も早くから傳へられて、只今ではそれが渡來語であることすら旣に誰も氣付かない位である。例へばカステーラ（粕底羅）、カツパ（合羽）、カナキン（金巾）、カルタ（歌留多）、カンテラ（小燈）カルメラ（糖菓）、アルヘイ（有平糖）、コンペート（金米糖）サボン（石鹼）、サラサ（更紗）、ジバン（襦袢）、パン（麵麭）、ビードロ（硝子）、ビロード（天鵞絨）、フラスコ（德利）ボタン（鈕）、其他ザボン、ボーブラ、ボーロ（丸ボーロ）等は葡萄牙語であり、オルガン（自鳴琴）、コツプ（杯）、ゴロフク（呉絽服）ズツク、サーベル、ブリキ、マンテル、ドンタク等は和蘭語である。又、タバコ（烟草）、ジヤガタラ（馬鈴薯）、ベンガラ（辨柄縞）、サントメ（桟留縞）、チヤウ（茶宇縞）、カボチヤ（南瓜）、シヤモ（鷄鬪）、ラウ（羅宇竹）等は、其の產地の名から出で、キセル、メリヤスは西語、シヤツボは佛語、シヤツ、ハンケチ、ランプ、バケツ、ミシン、ネル、ストーブ、テーブルは英語で、之等は今日から云へば、皆舶來歸化語であることは御承知の通りである。

尙ほ腰掛のバンコは抑もイタリヤ語で、傳へたものは蘭人である。

尙ほ最近の所謂外語的日本人語を擧ぐれば數限り無くあるエロとかグロとか聞きたくも無いのまでザラに出來つゝある有樣である。

第九章　古語を保存使用せよ

（一）　最近福岡日日新聞の「讀者より欄」に、東京の方言を眞似るな、との國語生からの投書があつて居たのを見た。即ち日本人位自國語に無關心の國民は少からう。東京語を以て大體規準とするのは先づよろしいが、東京の方言を以て、正しき國語に換へ用ひんとするのは、何といふ心得違ひであらう。「落ちる」といふ正しい言葉を「おつこちる」とか「破れる」といふ正しい言葉を「やぶける」など、おかしな東京語に代へる女などは、輕薄で嗤ふべきである。

或東京生れの子供が、筑後の小學校に入學したところ、先生が「毎朝面は井川(かはは)の水(み)ぢい、わがで洗(あつ)へ」と云はれるので言葉が通ぜずに困つたといふ樣な例もあるが、この方言のおかしいのと、東京の方言のおかしさは、寧ろ東京の方言の方が劣ると云つてもよろしいのである、それを東京生れの御母さんは、眞向からおこつて、學校の先生は、東京辯

を使つて貰はねば困ると云つておこられた。これは標準語正しい日本語を使つて貰はねば困るといふの意味の間違ひであつたらうと察する。

と、云ふのである。之れも一面の眞理を言ひ表はして居るものだと私は思ひます。日本の標準語は時代によつて幾變遷して居ることは申すまでもあるまい。平安語も大阪辯も今日では一方言に過ぎないのを見ても判るであらう。デ標準語亦必ずしも我が國語では無いのである。

(二) 只萬代に傳へて誇るに足る、日本民族の國語としては獨り記紀萬葉の所謂古語のみである。而して今日國中之れを多分に使用しつゝある國民としては、僅かに西九州人の一部と琉球人とに過ぎないのである。されば之等の地方民は我が國古語使用の貴重な國寶民族として、例の天然記念物保存法の精神を汲んでも保存せなければならないものである。然るに特に他地方から臨まれる教育者等が一概に「方言なり矯正すべし」等と強制的に學徒を鞭ちつゝあるのは、如何したものかと思ふ。私は曾て小學校長を勸めた際、或る中學校でその關係校長懇談會を催された席上、此の方言矯正の話が出たことがあつたので「先生方は先づ之等生徒の使用しゝある方言の中に如何なる種類の言葉があるかを調査されて然る後に矯正の方策を講ぜられよ、余をして云はしむれば、我が地方言の中には、幾多の古語が使用保存されて居るものである。云々」と、その漫然方言矯正の不都合を戒めたことがあるのを記憶して居る。

(三) 東北大學教授小宮豊隆氏が福日紙に掲載せられた「方言に就いて」の一節に、

事實方言には今日中央では、既に死語となつてしまつてゐるやうな、多くの古い言葉が、いまだに生き殘つて、多くは昔の儘の意味で、人々の間に用ひられつゝある。例を私の故郷の方言にとつて言へば、私の故郷の方言の中には、例へば「萬葉集」あたりに見えるやうな古い言葉が、殆んど古い儘の意味で、幾つも今尚用ひられてゐるのである。萬葉集巻九の

「……後れたる、菟原壯士い、天仰き、叫び哭び……」の

をらぶと云ふ言葉も、私の故郷のをらぶは、是れよりもう少し意味が廣く、ある距離から聲をあげて、人を呼んだりするやうな場合にも、同じくをらぶといふ言葉を使ふのである。

また私の故郷では、崖だの土手だのが雨や水の爲に崩壞する事を、くえると言つて居る。是も巻四の

「愛しと吾が念ふこころ速河の塞きと塞くとも、なほや崩えなむ。」の

くえると同じ意味の言葉であつた。また、私の故郷では、その中に加へたり、その仲間に入れたりする事を、かてる若しくはかつると言つてゐる。是は巻十六の

「醬酢に蒜搗きかてて鯛願ふ、吾にな見せそ水葱の羹」の

かてると同じ意味の言葉であつた。

また「萬葉」巻九の

「牡牛の、三宅の訥に、指向ふ……」

だの、巻十六の

「吾妹子が額に生ひたる雙六の事負の牛のくらひの上の瘡」

だのに出て來る、ことひうしは、私の故郷では、同じ意味でこつてうし若しくはこつていと言つてゐる。

ことひがいつこつてになつたのかは分からない。然しこつていといふ言葉が

「すいきのたけにあまるこつてい」といふやうに、少くとも元祿時代の俳諧には、既に登錄濟みになつてゐた言葉である事は、確かであつた。「諺草」には「特牛」出して其の下に「こつていのうしは誤り」と書いてゐる。こつていはなるほど訛であるのかも知れないが、然し好古がわざわざそれを誤りだと指摘しなければならなかつたほど、この言葉が當時可なり廣く行はれてゐたに違いない事は、是で見ても明かであると思ふ。

こつていといふ言葉は、四國、中國、畿内あたりにも、今尚殘つてゐる言葉であるらしい。

かてるといふ言葉が、嘗て米澤にもあつた事は、米澤藩から出した「かてもの」といふ本の名前が既に是を證明する。殊に、「かてて加へて」といふ言葉はもつと一般的の言葉である筈であつた。云々。」

尚ほ氏は、我が佐賀地方でも、今日尚ほ正直で誠實な人を呼ふのに「正直まつとうな人」と全樣な次の事を載せて居る。

吾山の物類呼稱を見ると「律義なる人を中國にてまてな人と云ひ、畿内及東國にてまたうどと云ひ、案ずるにまてな人又またうど共に全人と云ふ事也」と、書いてある。

遡つて貞室の「かたこと」にも正直の人をまたうどといへるは、出所や侍るらん、またき人ぞなど云へば、全きと略成

べし、ぞれを誤りてばし云ひそめたること葉敗。但直人と書いて、ただうどとよめり、其類成べきか、然らば眞人と書いてまたうどとよむべし」とある。仙台の方言を集めた濱荻の作者は「まていな、まてな共、眞體也。じつまてい共、或云ふ綿密なる事に用ふ」と言つて、この言葉に江戸言葉の「ていねいな」を當てゐる。云々

と、更に此の地方に、今尚ほ殘つて居る「とぜんな」即ち淋しい事を現はす方言の仙台地方に存する旨を述べて居られる。佐賀地方では「とぜんな」の次に「か」をも加へて居ることはご承知の通りである。

斯く方言に關する知識が過去の文藝を理解する上に、如何に必要なものであるかは、茲に之を呶々するまでもないことだと思ふ。然るに今日では、東京の言葉が、比較を失して尊敬され地方の言葉が亦、比較を失して輕蔑される傾向がある。一体東京の言葉は、元來三河の言葉や、關東、東北の言葉などをこつちやにしたやうな、然もやつと三百年か、そこいらの歴史をしか持つてゐない、割合に新しい言葉であるに過ぎない。だから地方は勿論上方や中國、四國や、また東國乃至東北各地の言葉の方が、東京の言葉よりももつと古く且つ純粋な歴史を持つてゐるのだから、東京の言葉に對して、もつと威張つてゐても可い筈である、然るに實際はそうで無くして、自分達の言葉を輕蔑する傾向さへある如うである、之に就いて小宮氏は「私にはよく分からない。然し私にははつきり分つてゐる事は、もつと言葉が尊重され、もつと言葉が研究され且つもつと言葉が學問の上にも藝術の上にも、活用される必要があるといふ事である。」と云はれて居る。

第十章　杵藤中心地方には、神代語が多い

（一）古琉球の著者文學士伊波普猷氏は琉球に今尚ほ多くの古語が殘存して居るのを見て

「日本々土では既に死語となつたもので、今尚琉球群島で使はれてゐる言葉が澤山ある。それを全部書き立てると一冊の本になる位である。兎に角之等の言葉を記紀萬葉源語の如き日本古代の文學を讀んだ筈のない小さい島々の愚民が日常使つてゐると聞いたら誰れしも驚かずには居れまい。思ふにこれらの言葉はたしかに琉球人の祖先が大和民族と手を別ちて南方に移住した頃に有つてゐた言葉の遺物である。琉球の單語は十中八九までは日本語と同語根のものであるといつても差支はない。たゞ音韻の變化や語尾の變化によつて一寸きいては外國語のやうであるが、能くきいてゐると日本語の姉妹語であることがわかるのである」。

嘗て大阪醫大の北垣蘭學士かゝ琉球に遊んで

〇眼を閉ぢて時と處を忘るれば神代に近き聲ぞ聞ゆる

と歌つたらしい、確に琉球には今尚ほ隨分古語が殘つて居る如うである。然も不思議なことにはその專ら古語を使つて居る之等琉球人の言葉と我が杵島地方に今は方言として卑められつゝある私どもの父祖が使つて居る言葉とがよくも共通して居ることである。之れに就いて思ひ付くことは、

（二）言語學者チャムバレン氏が明治二十七年頃琉球に遊んで種々の方面から球球を研究し、その翌年の英國地學雜誌（へ四號五號六號）に「琉球諸島及びその住民」といふ六十五頁の論文を掲げ、次で其後又「琉球語の文法及び辭書に關する論文」を世に公にしたのであるが、その後者の論文中に次の如うに言つて居ることの一節である。

「琉球人はその體質日本人に酷似して、モンゴリヤンのタイプを有してゐる。彼等の祖先はかつて共同の根元地に住してゐたが、紀元前三世紀の頃大移住を企て對馬を經過して九州に上陸し、その大部隊は道を東北に取りゆく／＼先住人民を征服して、大和地方に定住するに至つた。その間に南方に迫ひつゝあつた小部隊の者は恐らく或大事件の爲に逃れて海に浮び、遂に琉球諸島に定住するるに至つたのであらう。それは地理上の位置でも傳説の類似でも言語の比較でも容易く説明される。」

と云ひ、日本人と琉球人とが最著しい系圖的關係を有することを言語學上から氏は推論して、

「この二國語の文法を綿密に比較すると、語詞論に於ても根本的一致の存在することがわかる。しかもその一致たるやスペイン語とイタリー語との間に於ける一致の如きものである。單語の場合に於ても亦同樣の事が言へる。もしこの兩國語の祖語なるものがあつたとしたら、日本語はその祖先の或部分を忠實に保存し、琉球語はその祖語の他の部分を忠實に保存してゐる。而も近代の日本語が上世の日本語を代表するよりも、琉球語がそれを代表することが一入忠實である。それは動詞の語尾變化に於て著しく現はれてゐる。

要するに二國語の相互的關係をスペイン語とイタリー語の相互的關係否むしろスペイン語とフランス語の相互關係に

比較しても大過はなからう。」といつて、之れを次のやうにあらはしてゐる。

（組語）┌古代日本語——近代日本語
　　　　└古代琉球語——近代琉球語

現に内地に於ても中心点をさる遠い地方即ち奥羽、九州、出雲地方には、今なほ古音が多く保存されて居ることは事實である。

茲に音韻に就いて一例せば、日本語に於てはハヒフヘホの古音はパピプペポ（P）なる破裂的兩唇音であつたのが、七世紀（即ち推古天皇）以前からファフィフフェフォ（F）なる摩擦的兩唇音に變じ十五六世紀（足利の末）の頃からハヒヘホ（H）なる喉音に變始めたとは、今日學者間の定論となつて居る處である。但し今日でもフのみはやはり摩擦的兩唇音である。この音韻變化の運動の中心は勿論近畿地方であつて、漸次他方に傳播したのであるから我が郷土等に今尚ほ幸いに古語が殘留して居る譯である。

伊波學士は日本語で今日文學では吸フと書いて實際はフーと發音してゐるが、このスフは古くは文字通りスフと發音してゐたに相違ない。琉球語で吸フといふことをスプルといつてゐるのを見ると、七世紀以前の日本語では吸フをスプと發音してゐたに相違ないと云つて居る。又私が郷土でシヲカラシ（鹹）をシブカラサといふのも好適例であらう。

（四）　金澤博士の説が又此等の消息をよく傳へて居るから紹介すると、

「方語では他のもので知ることの出來ないものも知ることが出來るのですが、之を適切ならしむる爲に、沖繩人は何處より來たかといふことに付て、私の考を述べることに致しませう……第一方角の名稱によりて九州から來たことが明に分る。先づ内地語、アイヌ語及朝鮮語の三を比較研究して見るに、朝鮮語では南韓のことをアリヒシカラと申しますがこのアリヒは今日の朝鮮のアルプ前（南）と同じ言葉である。さうするとアリヒシカラは前の方の韓といふ意味であつて朝鮮人が北より南に向つて進むだ事を証する唯一の言葉である。内地語の「ヒンガシ」と云ふのは日に向ふの意味で、日本人は東に向つて進むことが分る。又ニシ（西）といふのはイニシ（過古）と云ふことであるから自分等が通つて來た所といふ意味である。アイヌ語で東のことをモシリパといふが「パ」は頭「モシル」は陸といふ意味である。又西の事をモシリグシユといふがグシユは尻のことであるから陸の尻といふことになる。此の方面に關する言葉の研究から朝鮮人は北より南に向ひ、内地人は西と東に向ひ、アイヌ人も内地人と同じく西より東に向つて進むだといふ事が分ります。

今沖繩語を研究して見れば、東を「アガリ」西を「イリ」と申して居るが、太陽の出る所をアガリといひ、太陽の入る所をイリといふたのは論ずるまでもないが、北の事を「ニシ」と云ふのは妙なことである。何故に北の事を「ニシ」と云ふのか、前に申した通り「ニシ」は「イニシ」（過古）といふ意味であるから之れによつて沖繩人が北より南に向つて進むで來たことが明に分ります。

沖繩人が大和民族であるといふ第二の證據は沖繩の名詞を研究して見ると分ります。沖繩では城のことを「グシク」と云つて居る。此のグシクといふ言葉は沖繩人が大和民族であるといふことを証する好材料となるのである。

グスク、グは勿論敬語である、朝鮮の古語では村のことをスキ村主のことをスクリ（宿禰と同様）と申しますが、この言葉は日本語に這入つて日本の位にもなつてゐたのであるが、それと同意義の言葉が日本語では城と書いて「シキ」と讀んで居る。大和の地方にシキと云ふ所があるがシキシマ（敷島）といふ日本國の名になつてゐる。シキと云ふ言葉を研究してみると「シ」は住むと云ふ意味で「キ」は圍の中といふ意味である、即ち圍の中に住むといふ意味になる、「キ」は垣のやうなもので圍つた所といふ意味である。然らば日本語で「シキ」朝鮮語で「スキ」といふのは一体どういふ所を指していふたのであるかといふと高い所にあつて石の壁で取りまかれて居る所といふ意味である、日本語の「シキ」も朝鮮語の「スキ」も沖繩語の「スク」も皆城壁と云ふ意味である。是等の名詞で正鵠なる判断が出來るので、沖繩は敷島即日本の一部であることは記錄がなくとも神話がなくとも沖繩人の祖先は日本人のそれと同じく「シキ」の中に住むで居たことが証明されます云々（琉球大觀）

（五）　私も茲で思ひ出すことは杵島の名の起りであるが、肥前風土記にはカシシマが訛つたものだとある、私は之迄いやそうではない、五十猛命等の植林事業から來たもので現に杵島山が日本三木山の一になつて居る處から木島が後に好字杵島に代つたものだと云つて來たが、此の金澤博士のご説を聽くとキシマはシキシマ（敷島）の根元を爲したものではないかとも思はれる、況や我か郷土が黒髪山を中心に全く天險の國

堅固の城砦を形造るに於ておやである。

尙ほ琉球に就いては藤井貞幹の如き素盞鳴尊は辰韓の主で、日本の皇室は吳の太伯の後で、神武天皇は琉球の惠平也島に御生れ遊ばした等をその著衝口發で發表して例の本居宣長から散々な反駁を受けて居る(鉗狂人で)又、久米博士は「日本民族の故鄕」で日本民族はもと南支那にゐたが琉球を經過して日本島に來たのであるとの說を發表して居られる。琉球人の中でもその日琉同祖說を唱へた向象賢(二百四五十年前)がある

(六) 向象賢はその「仕置」の中に次の樣なことを書いて居る「竊惟者此國人生初は日本より爲渡倭疑無御座候然者末世之今に天地、山川、五形、五倫、鳥獸、草木の名に至迄皆通達せり雖然言葉の餘相違者遠國之上久敷通融爲絕故也、五穀も人同時日本より爲渡物なれば云々」と、即ち言葉の上から琉球人の祖先が日本から渡つたといつて居る樣である。偖てその東へ南へは何處から分れて行つたか、私はどうしてもその根源地は之れを九州西北の地即ち我等の鄕土だと爲すものである。何となれば私どもの鄕土と日本の古語(記紀萬葉語等)偖又琉球に現在使用される言葉とが最も克く共通してゐるからである。

(七) 以下その共通語を例擧せんに、

しゝ(肉のこと)、ほそ(臍のこと和名保曾俗に云ふ倍曾)

こつちやう(骨張、古語で、手つよく、骨たくましきこと、盛衰記に「智積、覺明、佛光等のこつちやうの輩」とあり、馬鹿のこつちやう

よむ(算へること)、さくり(噦噎のこと、逆氣也)

ことい(又はこつてい牛とも云ふ、特牛のこと、牡牛の壯健なるものの稱で古語でめる。こつてい牛とも云ふ)

まる、燕のまりおける古くそ(竹取物語)屎麻理散(古事記)

ゆひまわる(又ゆいするとも云ふ、重に農事等の世話しい時に相互扶助すること。古語。老木「のこる田は十代にすぎじあすはたゞゆひもやとはてさなへとりてむ。」等、人夫を雇はずに近所の者同志が代りばんこで出て働くことに云ふ)

わたまし(又はおわたましとも云ふ、轉居の敬語である)。

あたらし(物惜みすること、阿多良斯、古事記にあり)。

くらけ(海月、久羅下、古事記にあり)。

もそろ〳〵(そろ〳〵との意)

よいさ〳〵(かけ聲)

とがめず(とがめること、登賀米受、古事記にあり)

ちふ(と云ふことである意、生ふちふあと川柳、萬葉集)

ごつ(古語の接尾語で、はやりごつ、まつりごつ、ひとりごつ等云ふ)

(八) 尙ほ混効驗集一名內裏言葉といふ古代琉球語の辭書を繙くと、之亦我が鄕土の言葉と全く同一のや古語が多い。

○人倫 おまへ(室を呼ぶ言葉)、くすし(醫師、古語)

○時候 けふ(今日)、あちや(明日)、あさて(明後日)きにふ(昨日)、ゆふべ(夕部)、ねぶりをり(眠折)、よなか(夜半)、ゆふまぐれ(夕眩)

○氣形 があとり(鴨)、あけづ(あきつ、古語)

○草木 らんのはな(蘭の花)

○器財 こがね(金子也)、くろかね(鐵)、とぼし(明松、たいまつ)、おとうろ(御行燈の事也)

○飮食 をふなべ(よふなべともいふ、夜職)、さゞい(榮螺)やまもゝ(楊梅也)、おたうふ(御豆腐)、びわ(枇杷)

○言語 わかみづ(若水)

○器財 ほこ(鉾)、まつるぎ(刀のこと神歌にも見ゆ)

○氣形 まや(猫)

○支體 しらげ(白毛)

○言語 いめ(夢、吳竹抄に見み)、ねたさ(寐たきこと、帚木の卷に見ゆ)、よべ(夕部也、夜邊共云、夕貌卷に見ゆ)、をり(居の字、長閑といふ所に家作りてをりける、と伊勢物語に見ゆ)、きたなき(きたなき事黑心と書か伊勢物語に、さる歌のきたなけさはと有)、もやく(虫などの澤山に集居て動をいふ蠢動と書く)、ねふさ(遲事、源氏物語ににふきと有、をこかなる心也、利鈍の字也)、いつとき(時の間の事乙時と書く)、ゆこふ(憩)ほんの(ほんに、誠と云事也)、ほしや(物を望事、ほしきと同じ)、みおもかけ(御面影)、しのぐ(淩)、よける(物をよきる事也)、よどむ(ゆたむ心、水のとゞこほること)、あたら夜(おしき夜のこと)、あつらへ物(誂物也)、山彥、さぐり(探せ)、くせ(癖)、まほろし(幻夢)さかさに(逆なるを云、縱令に人の子の親に先立をさかさまといふ也)、まさかり(最中さかりなるを云)、ねざめ(寢覺)、まだ(いまたの心なり)、なつかしき(物のなつかしき事也)、すぐれ(勝の字)、朧月夜(さやとかならぬ月をいふ)、おとろかす(驚の字)、あんまいらふ(子の親にあまゆるを云ふ)、とがむる(咎也)、おもひながす(思流す、思事のとをくなるを云)、おしなべて(何不別惣樣

云心也）、めざましき（自さむること也）、あやかる（呵の字しかりおとす事）、まんなか（眞中の事）、どまんぐい（どまぐれ、ど眩の字）、ざれ（たはふれ事也）、ひにやたぼい（ひこやたぼつこ、日に當るをいふ）、あげれ（食などくふを云）、あなかち（强なり）、めい日（忌日の事）そだて（養育）、のこ〜（のき〜何心もなく直に出入すること、のこ〜さい〜）、しほからさ（鹹きこと）、あまさ（甘きこと）、すいさ（酸きこと）、からさ（辛きこと）、にぎやさ（若きこと）、あい（そうである）、はづかしや（恥敷也）、川さらへ（井をらゆること）、つごもり（晦日の事）、あれ〜（彼々）、げに（實に）、めづらしや（珍敷）、ましろ（眞白）、まから（赤さ）かこへ（かんこへ、辯の能きこと也）、あまへて（ケオヒノ心）、つみつけな（積なから也）、うゐたび（初旅）、もちなし（饗應、もてなし）、かにあれ（とにあれ、角て有）、ざま（樣）いさとく（いさ疾く）、たながはり（種子變）、うら〜と（長閑なる休也）、すかす（賺、小兒などならす心也）、まじなふ（禁厭常共書）、はまる（狭入）、こたく（巨多く）、ぐら〜（愚亂〜）、ぐわた〜（瓦隤〜）、わめく（喚）、はつむ（却含、物）、くわら〜（瓦落〜）、ちび〜（逹微〜）

さら〜（雜亂〜）、ぎく〜（義屈〜）、くと〜（愚篤〜）、によこ〜（如孤〜）、によろ〜（如驚〜）、かれごへ（嗄聲）、あげくのはて（上句終）、ほつ〜（發々）、

（九） 琉球語案內に載せた當地方の言葉と共通せる彼地の方言

○名詞、ヒカイ（光）、アラシ（嵐）、ウーミヂ（洪水）、クーリ（氷）、ハル（春）、フユ（冬）、アチサ（暑）、ヌクサ（暖）、アサ（朝）、ヒルマ（晝）、ショウグワチ（一月）、ハウガク（方位）、トイ（酉）、イン（戌）、アヤー（母）、トシュイ（老人）、ワカムン（若者）、ワラビ（幼兒）、ダンナ（旦那）、コーチョー（校長）、イシヤ（醫者）、ニンブ（人夫）、ドシ（朋友）、アクジン（惡人）、ヌスド（盜賊）、サツクイ（咳）、クワイシヤ（會社）、ヤトヤ（旅館）、レウリヤ（料理屋）、シヤシンヤ（寫眞屋）、ヒチエー（額）、マユ（眉）、ハナ（鼻）、フー（頰）、クチ（口）、クチビル（唇）、ミヽ（耳）、クビ（頸）、カタ（肩）、ウデ（腕）、ヒヂ（肘）、ミヤ（社）、テラ（寺）、テンジョウ（天井）、タヽン（疊）、フデ（筆）、ハサン（鋏）、カガン（鏡）、カンスイ（剃刀）、ハウイ（羽織）、ハカマ（袴）、ジバン（襦袢）カサ（傘）、ヒバチ（火鉢）、ワン（椀）、サラ（皿）、ドンブリ（丼）、トックイ（德利）、カマ（竈）、ハガマ（釜）、タル（樽）テウチン（提灯）、マンヂウ（饅頭）、トーフ（豆腐）、シル（汁）サカナ（肴）、サシミ（刺身）、バグ（馬具）、クラ（鞍）、クニ（國）、グン（郡）、ムラ（村）、イナカ（田舍）、ミチ（道）、ヤマ（山）、ガマ（洞）、ハシ（橋）、ウミ（海）、ウミバタ（海岸）ハマ（濱）、シマ（島）、ナミ（波）、ウシ（牛）、ンマ（馬）、イン（犬）、マヤー（猫）、ヤマシシ（猪）、トラ（虎）、シカ（鹿）アユ（香魚）、アイ（蟻）、シラン（虱）、ニハトイ（鷄）、ガン（雁）、タカ（鷹）、クジヤク（孔雀）、ウグヒス（鶯）、アヒル（鶩）、アワ（粟）、トーマーミ（豌豆）、キーウイ（胡瓜）、ナシ（梨）、ビワ（枇杷）、ミカン（蜜柑）、サクラ（櫻）、ナンテン（南天）、アサガヲ（朝顏）

○數詞　イチ（一）、ニ（二）、サン（三）、シ（四）、シチ（七）、ハチ（八）、ク（九）、ジウ（十）、ヒヤーク（百）、マン（萬）、ミーチ（三ツ）、リン（厘）、ト（斗）、ゴウ（合）、シヤク（勺）シヤク（尺）、

前述の向象賢がその仕置の中に日琉兩國語の比較からして、琉球人の祖先や五穀等が日本本土から渡來したことを斷じて居るのだが、又爰には琉球全國最後の政治家とも云ふべき

（十） 三司官宜灣朝保が、明治初年に著はした「琉語解釋」の序文の中には、前述の向象賢が說を贊成して「まことにさることなるべし、古事記傳、萬葉集などを見るに、日本上古の言葉、爰には今も多く、殘れり云々。」と云つて居る。

現在日本內地では死語となつてゐる言葉でも、此の琉球諸島及び奄美大島諸島には猶使用せられて居るものが尠くない。前述の我が杵藤を中心とした鄕土でも尙ほ使用して居るもの〻外に、その一端を紹介して見ると、

なゐ（地震のことばで、今ネーと發音す）

うはなり、くはなり（嫉妬のこと、後妻「ウハナリ」前妻「コナミ」の轉）

しちやだん（小蝶「シタダミ」のこと、今歸仁地方で今もシチヤダミと云つて居る）

まゝき（和名抄に、細射弓箭、未末岐由美がそれ）

つべ（尻のこと、古語）

しし（肉のこと、鎌倉時代まで之を使用す、我が鄕土の古老で今尙ほ斯く云ふものもある）

いりき（頭のフケのこと、和名抄に、加之良乃阿加、俗云伊品古が夫れ）

なへぐ(塞ぐこと、郷土でも往々かく云ふことあり)
なす(産「ナ」すなり、郷土では「産する」と云ふ)
あもり(天降「アマオリ」りの約言、あまりともいへり)
ふぐり(フグイと發言す、陰嚢の古語、郷土でもほぐりと云ふことあり)
さゆみ(貲布「サユメノスメ」のこと)
かぶち(カーブチと發音す、枳椇、和名抄に加布智いが(我に同じ轉して阿賀「アガ」といふ、古事記三に伊賀作所仕奉於大殿内者云々。)
よこし(ユクシと發音す、虚言のこと、古事記四十に譏「ヨコシ」とあり)
ほふ(陰戸のこと、古事記に美蕃登、富登あり、萬葉集に保々萬留、布保隱とある、舎所の略ホト、頰も含む所で同語源である)
ひひらく(ヒーラと發音す、辛味を喰へば後迄口中疼くをいふ、郷土でヒデー、又ヒデルと云ふに同じ)
さだる(先へ行くこと)
等が夫れである。
(十一) 因に琉球語の音韻組織は、我國語と大同小異だが、

近代琉球語の特兆とも云ふべきものは、ア(A)イ(I)ウ(U)の基本母音のみが存して、エ(E)オ(O)の短母音が無い、之を五十音圖に照すとエ列とオ列とが缺げで居ることとである即ちエケセテネヘメエレヱがイ列のイキシチニヒミイリヰに轉じ、オ列即ちオコソトノホモヨロヲがウ列のウクスツヌフムユルウに合致してゐると合致してゐると思へばよいのである
以上は多少煩雜な說き方をしたものであるが、然し今日の大和文明の根元と琉球人の祖先とが共に我が郷土を出發点として東へ偖て南へ分れて行つたことを証據立てる爲めには是非之れ丈けのことを申上げねば判らないと思つたからである。
斯様に我が杵島を中心とした郷土には古代の言葉が今尙ほ存在するかと思ふと之亦馬鹿に最近我國に入つたオランダ語ポルトガル語等が他地方よりも多く使用されて全く我が國語の如く同化されて使つてゐる人もあやしまないものがある。例へば葡萄牙語としては
アルヘイ(有平糖)、カステーラ(粕底羅)、カッパ(合羽)、カナキン(金巾)、カルタ(歌留多)、カンテラ(小燈)、カルメラ(糖菓)、コンペート(金米糖)、サボン(石鹼)、サラサ(更紗)、ジバン(襦袢)、パン(麵麭)、ビードロ(硝子)、ビロード(天鵞絨)、フラスコ(徳利)、ボタン(鈕)、ザボン、ボーブラ。
和蘭語の中では、
オルガン(自鳴琴)、コツプ(杯)、ゴロフク(呉絽服)、ズック、ランドセル、サーベル、ブリキマンテル、ドンタク
尙ほタバコ(煙草)、ジヤガタラ(馬鈴薯)、ベンガラ(辨柄縞)サントメ(棧留縞)、チヤウ(茶宇縞)、カボチヤ(南瓜)、シヤモ(鷄鬪)、ラウ(羅宇竹)等は共産地の名から出で、西班牙語のキセル、メリヤス。佛蘭西語のシヤツボ。英吉利語のシヤツ、ハンケチ、ランプ、バケツ、ミシン、ネル、ストーブ、テーブル、伊太利語のバンコ(腰掛)等が夫れである。
我が國語に之等の外來語があることに最初着目したのは元祿年中で追に獨逸人だ、ケムフエルトと云ふ人が初めて共著に十數語を擧げてゐる、次で明治となつて英人サトーは數十語を發見した。
(十二) 我が國人で之れを精密に調査したのは村上直次郎氏で氏は約五百餘語を認めた、就中ポルトガル語は四百四十餘種に上り、次はラテン語で四十二、その次はスペイン語で十二、次がオランダ語で八と云ふ割合である。之れで以てその如何に先入主となるかを察すべきである、蓋し我國に最初の渡航者としては之れ云ふ迄もなくポルトガル人であるのである。
而も我が郷土はその貿易港平戸長崎に接近せしのみならず、我が舊藩主が長崎防備を擔當した關係から、常に彼等との間に郷土先輩の接觸が多かつた結果此に至つたものであることは云ふまでもあるまいかと思ふ。
琉球と云ふ本の中に「琉球は世界の博物館」だと書いてゐるのを見た。之から押せば矢張私が杵藤の郷土亦世界の一大博物館なりと云つても亦當らないことでもあるまいか。
(十三) 因に今日琉球固有の思想と琉球古代の言語を研究す可き唯一の資料としては琉球の萬葉集とも稱へられるオモロである。
オモロは今日では神歌とも云ふべき狹い意義に解せられるが元々現在の歌人が三十一字詩を詠むやうに一般の琉球人に詠まれたものである。
西曆十三世紀の初頃から十七世紀の中葉まで、殆ど四百年間に亘つて此のオモロを收めたものが「おもろおさうし」で全部で二十二冊、歌數壹千五百五拾壹首ある、此の中には琉球の

創世紀を初めとして、王者を謳つたもの、英雄を謳つたもの、戰爭を歌つたもの、航海を歌つたもの、詩人を歌つたもの、風景を歌つたもの、日月星辰を歌つたもので、唯一首戀愛を歌つたのがある。

前述の比較に供した言葉等皆此のおもろおそうしの中に記されて居るものである。

次に琉球開闢のことを謳つた一首を述べて見やうが、その如何内地の諸冊二尊の夫れに似通つて居るかを味つて貰いたいものである。

一、むかしはじめからのふし

むかし　はぢまり　や　てだこ　大ぬし　や　きよらや
てりよわれ
せのみ　はぢまり　に
てだいちろく　が　てだはちろく　が
おさん　しちへ　みおれ　ば
さよこ　しちへ　みおれ　ば
あまみきよ　は　よせわちへ
しねりきよ　は　よせわちへ
しま　つくれ　てゝ　わちへ
くに　つくれ　てゝ　わちへ
こゝらき　の　しま〳〵
こゝらき　の　くに〳〵
しまつくら　ぎやめも
くにつくら　ぎやめも
てだこ　うらきれて
せのみ　うらきれて
あまみや　すぢや　なす　な
しねりや　すぢや　なす　な
しやれば　すぢや　なしよわれ　（十の卷）

此のオモロを伊波普猷氏は次の如うに意釋して居る。

「最初に日神ありて八紘を照せり。日神俯して下界を瞻給ふに、島の如きものありければ、則ちアマミキヨ、シネリキヨ二柱の神に詔して之を修理しめ給ふ。

二神詔のまに〳〵降りて數知れぬ島々を造る。

日神その成るを遲しとし、更に詔して、そこは天つ國の民の如き者を造らずして、人類を造れと、宣ひき」日琉人の祠祖は此の開闢の一條でも十分に首肯されやうかと思ふ。

第十一章　肥人文字の存在は當年の文化を物語る之亦何よりの證左である。

（一）　伊勢貞丈は「神代には文字なければ、固より書籍なし只古人の語傳、人々の聞傳へし處、異同區々なるを、遙の後世に書記したれども、其語傳聞傳も同からぬゆゑ、之を記すにも同からぬことなり。日本記にも「一書曰」と云ひ、諸書の不同を共に擧げられたり、何れを正說と決定しがたき故なり。云々」と云つて居る。然し今日では漢字傳來以前に、我國字の存在したことが、神代文學、肥人文字等の發見から自然明瞭となつて來て貞丈をして唖然たらしめるものがある。

（二）　神代文學のことは暫らく措いて、此の肥人文字、又、肥人書を以て、古來肥國に存在して、此の肥國の文化を助ける上に、非常な貢献を爲したものであると信ずるのである。

然るに此の「肥人はコマヒトとも訓まれ、隼人の一類にて、肥國の球磨郡に居れる如し等」と途方も無い解釋をして居る。隼人には別に薩人書があることは次の通りだ。

(1)、白石先生紳書、四六、七二に

「本朝の文字一万計もありといふ。もとは龜卜より始まれり先畢を以て書く文字一字一つ有りて、それより龜兆の推したる樣をもて文字とす、今も吉田家には有り、但しことごとくは訓なきか、大かたは訓しれざる有り、字体は枯木の枝の如し、是れ龜兆のひゞきわれたる形なれば也、それを吉田家にて秘して、一々に訓をいはず、それは吉田の神を封ずる印、其の文字有るに依りて字義知れず、よめぬ事故に秘したる也。肥人書、薩人書、尾張書など、これは國々の文字也、通用し難し、今吉田家にある文字は、朝家の舊文なりしかど、漢字を用ひしより以來は、龜卜にならではいらざる事故に世人知らず、もし文字なくんば、開闢より應神迄幾千年の中、何を以て事を記せんや」。とある。而して之に說明を加へて、

「恒齊按ずるに、本朝に漢字を用ひし事は、應神の頃は異國に通ぜしより事起りしなり、本國許りなれば國字にて事足りぬれど、外國に通ずるに至りて、通じ難き故に漢字を用ひ初めたる成るべしとぞ」といつてゐる。又

(2)、松尾筆記二二三にいふ。

「本朝文字の始めは神功征韓以後にて、上古は口傳の外、さる記號のわざなきよし、古事記序、古語拾遺序などの說也、されど釋紀に肥人薩人の書名見え、崇神紀新撰姓氏錄などに崇神の御世任那附屬し奉れる事あれば、いとふるくより漢土の字傳はりけん、爾雅に倭人貢鬯草といひ、日本紀に一書

いふと引きたまへるなども、古く書ありけん、とおもふよし也。」等とあり、最早我國に肥人書のあつたことは、確かである。

（三）偖て、私が此の肥人書を以て、我が肥前國を主體とせる肥の國であると爲す。

第一の理由としては、黒川眞頼全集の次の日本書紀を讀む心得である。即ち、

我が邦に支那文字の入りしは、其の初朝鮮より入り、次に支那より入りて、遂に文字は日用必須のものとなれり、其の朝鮮地方の人の我が邦に歸化せし始は、天日槍なれと、此の天日槍は大國主神と時を同じくせれば、文字は未だ將來すべからず、神武天皇東遷の後は、朝鮮及支那の人民の我が邦に歸化するもの多く、殊に崇神天皇以來は滋々多し。事は崇神紀以後の紀を見て知るべし。中に就きて、彼の天日槍の子孫は歸化して以來多くの年代を經たればその子孫及び其の屬從のもの、肥前、肥後、播磨、淡路、近江、但馬等に蕃息せしが其の肥前、肥後の地にある者は、頗る豪富にて、朝鮮地方に往來し、又支那にも往來せしことは、後漢書光武紀にも見えたり。歸化人の種類多かりしこと大略此のごとし、其の歸化人及びその子孫は、文字を以て事を記するが本土の風俗なれば、天皇の御歴代の事、又自己の祖先以來の事、又住み著きたる地を開きし事、又工藝を弘めし事などは、文字を以て書紀せり、是れ我が邦の書傳の由りて來たる所なり（廣文庫第十九冊）

（四）之に依つて見ても肥人書は當然存在したに相違無いと思はれる、然るに尙ほ第二の理由として擧げたいのは、漢書に、秦の徐福が百篇の尙書を携へて、我國に將來したといふことである。前に金立神を以て此の徐福を主祭神とせることの非なる所以を論じたが、兎角孝靈天皇の七十二年に秦から徐福が、我が肥前に來たのは來たに相違ない、夫れが年代觀念の比較的乏しかつた上代人には、天忍穂耳尊の神話とコンガラがつて不二一体の說を生み出した嫌はあるが、然し此の徐福の傳說も亦決して侮ることは出來無い節もあるのである。さて此時尙書が持參されたとせば、先づその尙書は此の肥前から先きに繙かれた譯である。

（五）魏國に聘禮した女人國の文化の如き之亦侮ることの出來ないものがある如うに、肥前は神功皇后三韓征伐以前、早く日本國内に於て十分なる文明を將來してゐた所以も神代この方既に幾度となく前述の如うに大陸の文化が、此の肥前を門戸として我國に輸入された結果である。論者或は謂はん、神代からの海外移入の門戸は灘津なりしと、然り灘津も亦その一門戸であつたに相違無い、然し韓魏の地から此の灘津に到る前には、先づ我が肥前に一應船を繋いで、扨て玄海の天候をばチツと見定めた上で其處に入つたものであることは、後年遣唐使等の支那への航海が十分之れを證明してゐるのである例へば彼の田道間守（但馬毛理）が常世國に橘果を需める際の如きその往復を我が伊萬里からしてゐるのを初め、神功の三韓征伐から、下つて豐臣秀吉の朝鮮征伐までが皆然うである。德川の代から明治初年の文明が、肥前の長崎を門戸として、江戸若くは東京に輸入されたのも亦、此の古來からの傳統を追ふて、總て易きに就いた所以であるやうである。

（六）應神天皇の漢字移入前、斯る立場に置かれた此の九州特に我が肥前に、彼等と應酬し自らを記す上に必要な文字様のもの〻必要的に存在したであらうことは誰だつて首肯する所ではあるまいか。肥人文字をクマビトと稱する處から、之を今日の熊本縣の山間部玖磨郡なり等と爲すのは、餘りにも一小部分の理窟に凝つた、例の盲者の象探しとそこに何ら撰ぶ所があらんやである。況んや彼の

（七）神代秘史の傳ふる處では、神代に於て既に完全な筆紙墨があつて、而も夫れが我等祖先の創造になるものだとさへあるに於ておや。

（八）畏友嬉野米一郎君書を寄せていふ。

史談誌御掲載の通り、實に日本の文化は、火の國から。誠に其の通り小生の說としても平戸、五島は、遣唐使の往還地、小野妹子も平戸を經由せり。

唐の文明四書、五經、曆等皆肥前を經由す、從つて是と同時に、唐土韓土の異賊襲來を防ぐ即ち國防の第一線に立てり。又、神功皇后の三韓征伐、豐太閤の朝鮮征伐も亦肥前を根據とせり。

藩政時代より長崎に砲臺を設け、外寇に備へ、且つ長崎に幕府の學校を設けて、醫術、砲術、語學を教へ、爲めに長州の高杉晉作、伊藤博文、井上馨、佐賀の副島、大隈等皆長崎に學ぶ。勤王佐幕の兩論起るや、佐賀、大村、平戸は率先して、勤王の大義に參加し立憲政体の先驅を爲せり。實に肥前は王朝時代より明治に至る迄、文明の先驅、此の點洵に貴所の御意見之通り、然るに教育家未だ此点に調査し居らす候。

蓋し私の結論を君が克くして哭れたものだと感謝して一應爰に此稿を擱く。

版權所有

昭和八年七月廿五日印刷納本
同　年八月一日發　行

定價金三十錢

佐賀縣杵島郡福治村大字福田二〇三番地
著作兼發行者　山口良吾

佐賀市紺屋町百三十九番地
印刷者　深堀文平

仝　所
印刷所　深堀尙文堂

發行所　肥前史談會
佐賀市松原町無番地佐賀徵古館内
（電話一、二二二番）

終